

四つの難題の解明の旅
(完全版)

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

四つの難題の解明の旅

第一部

①ソクラテスと「デルポイの神託」

- 一、「デルポイの神託」について
- 二、「デルポイの神託」以前と以後との違い

※ 参考文献

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

四つの難題の解明の旅

第二部

②ソクラテスの「没我的思考」

- 一、二つの「思考方法」
- 二、書物との対話
- 三、本来の「哲学的問答法」
- 四、大学生の場合
- 五、車の両輪
- 六、智を生めない者
- 七、結び

ソクラテスの「物想い」

* 参考文献

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

四つの難題の解明の旅

第三部

③ソクラテスの「ダイモンからの合図」

- 一、 知性と理性
- 二、 母体のようなもの
- 三、 内なる神
- 四、 政治家に反対
- 五、 なぜ、合図はなかったのか
- 六、 最大の謎解き
- 七、 ダイモンからの合図の推移
- 八、 「量刑」の申し出の「謎」

* 参考文献

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

四つの難題の解明の旅

第四部

④ソクラテスの「産婆術」

- 一、 産婆とは
- 二、 産婆術とは
- 三、 なぜ、智を生めない者なのか
- 四、 神が定め給うたとは

* 参考文献

第一部

ソクラテスと「デルポイの神託」

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第一部

①ソクラテスと「デルポイの神託」

- 一、「デルポイの神託」について
- 二、「デルポイの神託」以前と以後との違い

※ 参考文献

「デルポイの神託」

「デルポイの神託」について

それは、ソクラテスの若い時からの友人で、何をやりだしても熱中するたちだったカイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけて行って、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。——それはつまり、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということ、たずねたのです。すると、その巫女は、より知恵のある者はだれもないと答えたのです。……」（『ソクラテスの弁明』）

この「巫女のお告げ」そのものには、それほど意味はないだろう。大事なものは、むしろソクラテス自身がそれをどのように受けとめたのか？ その「受けとめ方」にこそ、それ以前とそれ以後とのソクラテスの人生を大きく変えてしまう、まさに「決定的な要因」があるわけである。

友人（ミゼテ）から聞く。

それを聞いて、ソクラテスは、「……いまの神託のことを聞いてから、わたしは、心にかういうふう考えたのです。いったい何を、神は言おうとしているのだろうか。いったい何の謎をかけているのだろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだと自覚しているのだから。すると、そのわたしをいちばん知恵があると宣言することによって、いったい何を神は言おうとしているのだろうか。というのは、まさか嘘を言うはずはないからだ。神にあっては、それはあるまじきことであるからだ」と、受け止めます。そして、ソクラテスは、その神託の「真意（謎かけ）」をぜひとも解明しなければならぬと考えるわけである。

そして、長いあいだ、いったい何を神は言おうとしているのであろうと、わたしは思い迷っていたのです。そして、まったくやつとのことで、その意味を、次のような仕方です、たずねてみることにしたのです。

それは、だれか知恵があると思われる者の一人を訪ねることだったのです。ほかはともかく、そこへ行けば、神託を反駁して、ほら、この者のほうがわたしよりも知恵があるのです。それだのにあなたは、わたしを知者だと言われた。というふうには、託宣に向かつてはつきりと言うことができるだろうというわけなのです。

ところがその人物——というだけで、とくに名前をあげる必要はないでしょう。それは政界の人だったのですが、その人物を相手に問答しながら子細に観察しているうちに、アテナイ人諸君よ、わたしは次のようなことを経験したのです。つまり、この人は他の多くの人たちに知恵のある人物だと思われるらしく、また、とくに自分自身でもそう思いこんでいるらしいけれども、じつはそうではないのだとわたしには思われるようになったのです。そしてそうなったとき、わたしは、彼に、君は知恵があると思っただけでもそうではないのだと、はっきりわからせてやろうとつとめたのです。するとその結果、わたしは、その男にも、そして、その場にいた多くの者にも、憎まれることになったのです。

ここで、いつも問題になるのは、ソクラテスは、なぜ、相手が「知恵のある人ではない」とわかった時点でやめずに、あえてその無知を「はつきりとわからせてやろうとつとめた」のだろうか？ これは、確かに余計なことになるだろう。しかし、相手と直接「対話（議論）活動」を行なうという行為は、お互いの考えを「一問一答の形式」で一つ一つ確かめながら前に進んでいくものである。しかも、自分だけわかっていても仕方がないので、相手にもはつきりとわからせるためにも、相手の考えのどこがどのようにおかしいのかを、はつきりと言葉に出して説明していかなければならない。そのようにしてお互いの考えの矛盾点やおかしな点などをお互いに厳密に「吟味・検討」し合いながら、その「対話（議論）」を次から次へと展開させて論点を深めていくわけだから、相手が「知恵のある人ではない」とはつきりとわかるところまで「対話（議論）」を重ねていく過程は、そのまま相手の無知を言葉に出して暴露していくような過程にならざるを得ないものである。

しかも、ソクラテスにしてみれば、相手の人が自分より間違いなく知恵があるという、自他ともに認めるようなまったく揺るぎのない「確証」が得たいわけであるから、どうしてもその「対話（議論）」というものは、適当なところで妥協をして、もうこの辺でいいだろうという中途半端なところでやめるわけにもいかず、相手の論や考えに矛盾やおかしなところがあれば、そこを徹底的について、お互い納得がいくところまでとことんつっ返んだ。「対話（議論）」を行なうような形にならざるを得ないものである、それは、相手の「無知」を言葉に出して露骨に暴露していくような感じにもなってしまうものである。しかも、相手は、多くの人たちから知恵があると思われる、また、社会的な地位も負けん気も強い政治家であれば、政治家としての「面目」にかけても、自分の論や考えの矛盾や無知などを容易に認めようとはせずに、執拗に反論してくるだろうから、ソクラテスとしても、とことん相手の「無知」（その場合、政治に関する知識などがあるかどうかではなく、むしろ人間の諸問題に関する大事なことから《つまり「善美のことがら」》をしつかりと知っているかどうかの厳密な吟味に耐えられないのに、つまり、ほんとうは知らないのに、知っているかと思いついて無知）を暴露していくような形にならざるを得ないだろう。

そして、その「対話（議論）」に負けた人は、非常に気分が悪い。何か自分の「全人格」を頭から否定されたような耐えがたい敗北感と屈辱感を味わわれるものである。その結果、議論した相手を心の底から憎むような気持ちになったとしても、ある程度は仕方のないことかも知れない。もちろん、ソクラテスにしてみれば、そのようなことが目的ではなく、神託に反駁するためには、自分よりも知恵のある人を捜し出さなければならぬ。そして、いかにも知恵のありそうな人を見つけ出したならば、今度は、その人が間違いなく「知恵のある人」であるかどうか、あらゆる角度から徹底的に「吟味・検討」してみなければならぬ。そして、そのような厳密な「吟味・検討」を徹底的に行なうということは、取りも直さず、相手の「無知」を露骨に暴露するような結果になってしまうのは、むしろ当然のことである。それゆえ、もうその最初の段階から、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはつきりとわからせるような（つまり自覚させる）ような行為（行動）になつてしまったのは、なり行き上、むしろ仕方のなかったことである。しかし、そのようなことは、同時に、ソクラテスへの「逆恨み（憎しみ）」になつてしまったというのも、ある程度は仕方のないことかも知れない。（なぜなら、われわれ人間というのは、自分の欠点や

弱点などを他人からはつきりと指摘されることが何よりもきらいだからである。)

そして、わたしは、彼と別れて帰る途^{みち}で、自分を相手にこう考えたのです。

この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男も、わたしも、おそらく善美のことがらは何も知らないらしいけれど、この男は、知らないのに何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っっている。だから、つまり、このちよつとしたことで、わたしのほうが知恵があることになるらしい。つまり、わたしは、知らないことは知らないと思う。ただそれだけのことで、まさっているらしいのです。(21d)

これが、有名な「無知の知」(或いは「無知の自覚」というものである。ただ、ここで最も大事なことは、むしろ「善美のことがら」という言葉であり、この言葉を軽く読み流してはいけない。なぜなら、ソクラテスは、人間にとって最も大事な問題とは、すなわち、「善美のことがら」(一般には「徳」≪正義、勇気、節制、知恵、その他≫のこと)ではあるが、その「徳」のなかでも≪より根源的な「善美の問題」≫こそは、最も大事な問題である、と、はっきりと明言していることになるからである。そして、その師ソクラテスの遺志(精神)を真に受け継いで、人間にとって最も大事な問題である、その「善美の問題」を全精力を傾けて根源から説明しようと試みたものが、まさにプラトンの、あのあまりにも有名な「美のイデア」と「善のイデア」であり、それこそ、まさにプラトン哲学の「最高峰」とも呼ばれているものである。

さて、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ人たち(手工者)、その他、いろいろな人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていくことになるが、その「遍歴」については、つぎのように語っている。

それで、それ以降、今日まで、つぎからつぎへと歩いてみたのです。自分が憎まれていくというのはわかっていたし、それが苦にもなり心配にもなったのですが、しかしそれでも、やはり、神のことはいちばん大切にしなければならぬと思えたのです。ですから、神託の意味をたずねて、およそ何か知っているとされる人があれば、だれのところへでも、すべて行かなければならないと思っただけです。(中略)

まあ、とにかく、わたしのその遍歴というものを、諸君のお目かけなければならぬ。それは、まるでヘラクレスの難行みたいなのですが、結局は、神託に言われていたことが、わたしにとっては、否定できないものなのだということになるのです。

そして、ソクラテスは、次のような結論を出すことになる。

つまり、こういう詮索をしたことから、アテナイ諸君、たくさんの敵意がわたしに向けられることになってしまったのです。しかもそれは、いかにも厄介至極な、このうえなく耐えがたいものなのでして、多くの中傷もここから生じる結果となったのです。しかし名

前は、知者だというように言われるのです。なぜなら、どのばあいにおいても、わたしが他の者を何かのことでやりこめたりすると、そのことについてはわたし自身は知恵をもっているのだと、その場にいる人たちは考えるからなのです。

しかし、じつさいは、諸君よ、おそらく、神だけがほんとうの知者なのかもしれないのです。そして、人間の知恵というようなのは、なにかもう、まるで価値のないものだと、神はこの神託のなかで言おうとしているのかもしれないかもしれません。そしてそれは、ここにいるこのソクラテスのことを言っているように見えますが、わたしの名前はつけたしに用いているだけのようです。つまり、わたしを一例にとつて、人間たちよ、おまえたちのうちでいちばん知恵のある者というのは、だれであれ、ソクラテスのように、自分は知恵に対してはじつさい何の値打ちもないのだということを知った者が、それなのだ、言おうとしているもののようなのです。

このソクラテスの結論そのものには、それほど大きな意味はないだろう。なぜなら、そのような結論（つまり己の無知を知ることや人間の知恵などはたかが知れているということ、そして、神だけが真の知者であるということなど）は、ソクラテス自身にとつては、最初からわかりきっていたことであり、それを再確認しただけに過ぎないからである。それゆえ、それだけでは、ソクラテスの人生を大きく変える「劇的な事件」とはなり得なかっただろう。なぜなら、「デルポイの神託（お告げ）」の意味がそういうものだけであれば、その意味がわかった時点で、もうわざわざ次から次へと「知者」を捜しまわる必要もなければ、また、その人と「対話（吟味）活動」などを行なって、若しもその人が「知者」でもないならば、そのことを相手にはつきりと自覚させるといふような余計なことをして、その人たちから嫌われたり、憎まれたりするようなことは、さつさとやめることもできただろう。また、知を愛し求める仲間やその他の人たちと親しく「対話（議論）活動」を行なっているほうが、よほど楽しかったに違いない。それでは、一体、ソクラテスの「心の中」でどのようなことが起こったから、人に嫌われ、憎まれてまで、そのようなことを死ぬまで積極的にやり続けたのだろうか？

それは、次のような「内的事件」が、ソクラテス自身の「心の中」ではつきりと起こったからに違いない。

つまり、ソクラテスも最初は自分より知恵のある人をさがし出しては、ほら、この人のほうが自分よりも知恵を持っているじゃないかと、神託に反駁することを目的として、わざわざ知者と思われる人たちのところまで出かけて行って、あれこれ対話してみるわけである。しかし、いろいろな分野の知者と思われる人たちとあれこれ対話をしていくうちに、どうも自分のほうが、知らないことは知らないとはつきりと自覚している分だけ、世の知者たちよりは、少しばかり知恵があるのかも知れないと思うようになるわけである。そして、そのような意味からも、どうも「デルポイの神託（お告げ）」は、うそではなかったという結論にならざるを得ないと思いつながら、それでは、神は、なぜ「ソクラテスより知恵のある者はいない」などというお告げを、わざわざ友人を介して、私に知らせてくるようなことをしたのだろうか、あれこれ考えているうちに、ソクラテスは、「ああ、

そうか！」と、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、ある「想い」に襲われることになるわけである。それは、まるで「重苦しく覆おおっていた心の暗雲が一瞬にして晴れるがごとく、あるいは、その暗雲のその奥からまさに眩いばかりの「光」が差し込む」がごとく、ある日、ある時、ソクラテスの脳裏に「天雷」のごとくどこからともなく突然として襲いかかってきたに違いない。

——「ああ、そうか！」、こうやって、毎日、誰か知恵があると思われる人がいれば、もう老若男女を問わず、また、どのような分野のどのような人であれ、その人と親しく「対話（吟味）活動」を積極的に行なつては、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」（つまり人間にとつて最も大事なことがらを熟知している人）でもないのに、何か「知者」（つまり人間にとつて最も大事なことがらを熟知している人）であるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはつきりと自覚させるような「行為（行動）」、そのような「行為（行動）」は、例の「デルポイの神託（お告げ）」以降、自分よりも知恵のある人を見つけ出しては、いわゆる「神託に反駁したい」一心から、ずつと行なつてきたわけだが、しかし、今から思えば、まさにそのような「行為（行動）」をさせるためにこそ、「神」はわざわざあのような「謎かけ」を、「私」にしてきたに違いないと解釈するわけである。この時、ソクラテスは、はつきりと神の「謎かけ」の真意を理解したことになるわけである。——すなわち、これからの人生で自分がこの世でやらなければならぬことは、どのような分野のどのような人であるを問わず、必要があれば、どこの誰とでも積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはつきりと自覚させるようなことこそは、すなわち、「神からの絶対的な命令」であると考えようになるわけである。——「……それは、神託によつても伝えられたし、夢知らせによつても伝えられたのです。また、ほかに、神の決定で、人間に対して、まあ何であれ、何かをなすことが命じられるばあいの、あらゆる伝達の方法がとられた」わけであるが、しかし、やはり「デルポイの信託（お告げ）」こそは、最も決定的なものとなったことに間違いはないだろう。なぜなら、もし、あの「デルポイの神託（謎かけ）」がなかったならば、わざわざ政治家を初めとして、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、そのような一般に「知者」と思われている人たちのところまで出かけて行って、その人と「対話（吟味）活動」を行ない、そして、その相手の人が真に「知者」であるかどうかを厳密に「吟味・検討」するというような、そういう余計な「行動（活動）」をする必要などどこにもなかったからである。

それ以後、ソクラテスは、上述のような「使命感」をはつきりと持つて、

だから、これがつまり、わたしがいまだにそこらを歩きまわつて、この町の者であれ、よその者であれ、だれか知恵のある者だと思えば、神の指図にしたがつてこれを探し、しらべあげているわけなのです。そして知恵があるとは思えないばあいには、神の手助けをして、知者ではないぞということを明らかにしているわけなのです。そしてこの仕事に忙しいために、公私いずれのことも、これぞというほどのことをおこなう暇いとまがなく、ひど

い貧乏をしているのですが、これも神に仕えるためだったのです。

では、「神託」以前とそれ以後とは、いったい何がどう大きく変わったというのだろうか？ この問題を、もう一度、再確認しておきたいと思う。まず、「神託」以前のソクラテスの行動範囲であるが、恐らく、「神託」以前のソクラテスは、知を愛し求めるような人たちを中心として、いろいろな問題について哲学的な「対話（議論）活動」を楽しんでいたのだろう。つまり、気の合った仲間や同じような志向（愛知心）を持つ人たちが、また、街頭に出て、そこで興味や関心を持った若者や人物などを相手に好んで「対話（議論）活動」を行なうような、そういうある程度限られた範囲での活動が中心ではなかったのだろうか。つまり、「神託」以後のように、何らかの「知恵を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であれ、また、老若男女を問わず、もう誰であろうと手あたり次第に次から次へと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていくような状態とは、少し違っていたのではないだろうか。むしろ、「デルポイの神託」以前から、街頭に出て、若い人たちははじめ、いろいろな人たちと好んで「対話（吟味）活動」を行ない、相手を吟味するようなことも当然行なっていただろうし、また、それを自分の仕事なり使命なりとも思っていたかも知れない。しかし、それをもう全く揺るぎのない「神からの絶対的な命令」とまでは考えてはいなかったのではないだろうか。

ところが、「神託」以後（特に神託の真意が分かった以後）は、神からの絶対的な命令という極めてはっきりとした「使命感」を持って、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行って、そして、もし相手の人が何らかの「知恵を持っている人」だと思えば、もう老若男女を問わず、また、どのような分野のどのような人であれ、また、たとえその相手が苦手な相手であっても、また、こんなことを言えば相手から憎まれるだろうと思っても、積極的にいろいろと「対話（吟味）活動」を行なっては、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合いい、そして、若しも相手の人が知者でもないのに、何か知者のように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるようなことを、毎日の日課のようにするわけである。（つまり、ソクラテスの「対話相手」が無限《かつ無制限》に拡大されたということが一つと、もう一つは、その「使命感の強さ」がさらに強固に、全く揺るぎのないものになって行ったということが、以前とは違って来るわけである。）

それでは、相手の「無知」を自覚させるとは、一体、どういうことなのか？ もちろん、それは、相手が知者でもないのに、知者だと思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させることではあるが、しかし、それをもっと拡大してみると、例えば、正しくもない行為をなにか正しい行為だと思いついて無知、また、まだ何者でもないのに、すでもうひとかどの人間であるかのように思い込んでいる無知、また、ほんとうに大事なもの（や大切なもの）を粗末にあつかい、そして、取るに足りないものを何か価値あるものや優れたものだと思いついて無知、その他、そういう様々な「無知」（＝思い違い）をしているようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるようなことも含まれているわけである。そして、それらの「無知」は、すべて物事を深く考えて、より厳密に「真偽」を見極めるといいうことができていないからであり、また、物事をより厳密かつより正しく「判断し、評価する」ことができていないために生じるも

のである。それゆえ、何よりも自分の「魂」（精神）をできるだけ真に優れたものにする
ことよってこそ、それらの様々な「無知」からは解放されることになるわけである。

*

*

ところで、ソクラテスは、なぜ、あれほどまでにいろいろな人たちと積極的に「対話（吟
味）活動」を飽きもせず死ぬまで好んで行なったのだろうか？ それはもちろん、それが、
まさに「神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）であると固く信じていたからであろ
うが、それと同時に、より「根源的な理由」としては、それこそは、まさに「知を愛し求
めてやまぬという心」からということになるのだろう。そして、それはもう本人すら如何
とも止めようのないものだったに違いない。

むろん、それは、もう若い時（少年の頃）からずっと続いてきたであろうが、しかし、
若い時の「知を愛し求めてやまぬ心」とは、何よりもその人の知的好奇心を満たすためと、
もう一つは、自分自身を育て上げるためのものであり、そのほとんどが「自分のため」の
ものである。そして、若い時期というのは、ほとんど例外なく、もう誰でも実に様々なも
のに「興味や関心」を示す時期であり、それゆえ、ソクラテスも、若い時には、ホメロス
の叙事詩をはじめ、様々な悲喜劇、当時の有名なソフィストたち、また、いろいろな自然
哲学、その他、実に様々なものに「興味や関心」を持って、恐らく、十代、二〇代は、そ
のような極めて旺盛な「知的遍歴」を行なって過ぎしていったに違いない。そうでなければ、
どうして後年のソクラテスが存在できただろうか。もちろん、それは、ソクラテスだけ
の問題ではなく、すべての人間において、十代、二〇代をどのように過ごすかは、極めて
大きな問題であり、この時期に極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることよってこそ、物事
を極めて厳密に考え深めていくという真の「思考（思索）能力」をしっかりと身につける
ことが可能になるということである。そして、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経
ることよってこそ、ソクラテスの「内的世界」もほとんど「内的成長」していくことにな
り、やがて、いろいろな人たちから一目おかれるような存在になって行ったということ
である。それが、恐らく、「三〇歳前後」くらいではなかっただろうか。

それはともかく、後年のソクラテスは、実にいろいろな分野のどのような人たちであれ、
また、老若男女を問わず、必要があると思えば、その一人一人の人と親しく「対話（吟
味）活動」を行ない、いわゆる「無知の状態」（様々な「思い違い」）のところどとかく
眠りがちな意識を、はっきりと目覚めさせるようなことを、毎日の日課のようにしていた
わけである。つまり、「……彼は、絶えず家の外で暮らした。早朝から遊歩路や道ベリバトス、ギムナシオン場へ
出かけて行き、市場の出盛る午前中は市場におり、それからあとは一日中、いつも大勢の
人間が寄り集るところへ来ていた。そして大抵は議論しており、誰でも彼の話を聞いたの
である。……」（ソクラテスの思い出、第一巻、10～11）

そして、長い間、ソクラテスは、毎日のように、朝早くから遊歩道や体育場、また、広
場（市場）や街頭、その他、そのようなところを歩きまわっては、いろいろな人たちと積
極的に「対話（吟味）活動」を行っていたわけだが、その姿というものは、多くのアテ
ナイ人たちにとっては、かなり奇妙で変わった人間として見られていたに違いない。しか
し、ソクラテスがそのような行動をしていたのは、実は「人々の無知を自覚させるという
神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）を受けていたからだということ、例の裁判
の場で、初めて多くのアテナイ人たちは知らさせることになるわけだ。もちろん、そんな

ことを聞かされても、ほとんどのアテナイ人たちにとっては、何のことだかその真意はわからなかっただろう。しかし、ソクラテス自身にとつては、「……わたしは、なんのことはない、すこし滑稽こっけいな言い方になるけれども、神によつてこの国都ポリスに付着させられている者なのです。それはちようど、ここに一匹の馬がいるとして、これは素性せいじやうのよい大きな馬なのですが、大きいためにかえつてふつうより鈍にぶいところがあり、目をさましているのは、なにか虻あぶのようなものが必要だという、そういうばあいにあたるのです。つまり神は、わたしをちようどその虻あぶのようなものとしてこの国都ポリスに付着させたのではないかと、わたしには思われるのです。つまりわたしは、あなた方を目ざめさせるのに、各人一人一人に、どこへでもついていって、膝をまじえて、まる一日、説得したり、非難したりすることを、すこしもやめない者なのです。……」と、自らをそう考えていたわけである。

そして、「……わたしが歩きまわつておこなっていることはといえ、ただ、つぎのことだけなのです。諸君のうちの若い人にも、年寄りの人にも、だれにでも、魂ができるだけすぐれたものになるよう、ずいぶん気をつかうべきである……」と。なぜなら、われわれ人間を不幸にしているのは、正しくもないことをなにか正しいことだと思ひ込んだり、また、いちばん大事なものをいちばん粗末にあつかい、どうでもよいようなものを不相応に高く評価したり、その他、そういう実に様々な「無知」(つまり「間違つた判断、評価、認識、また、間違つた価値観や人生観、その他」など)から生じてくることが多く、それらの実に様々な「無知」から解放されるためにも、自分自身の「魂」をできるだけすぐれた思慮あるものにすべきであるというのが、ソクラテスの最も基本的な「考え方」になるということである。

そして、

ソクラテスは、死ぬまで(つまり、毒杯を仰いで意識が薄れていくその瞬間まで)、いろいろな人たちと人間の諸問題について、親しくかつ真剣に「対話(吟味)活動」を続けることになるわけである。それはもちろん、「知を愛し求めてやまぬ」というソクラテスという人間の、一生涯を通しての「魂そのもの」からの絶えざる欲求であつたからである。それが、それに加えて、自分と対話相手の「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思ひ込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるような活動こそは、そのまま「神からの絶対的な命令」(つまり「天命」)であると固く信じていたからでもあるのだろう。

*

*

「デルポイの神託」以前と以後の違い

「デルポイの神託」以前と以後の違いについて

さて、「デルポイの神託」以前と以後とでは、ソクラテス自身の「行動範囲」がはっきりと変わったということが、なぜ、そうはつきりと言えるのか？ この「問題」について、もう少し丁寧に考えてみたいと思う。

まず、ソクラテスは、その『弁明』のなかで新しい訴えと古くからの訴えとを区別し、そして、古くからの訴えから弁明を始めることになるわけである。それでは、その古くからの訴えとは、いったいどういうものかと言えば、それは、「……ソクラテスというやつがいるけれども、これは空中のことを思案したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な知恵をもっているやつなのだ……」とか、また、裁判に訴えられた理由の一つも、「……ソクラテスは犯罪者である。彼は天上地下のことを探求し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている。……」というようなものである。もちろん、ソクラテス自身は、そんなことはしていないと、はっきりと否定したあと、次のように話を進めていくわけである。

「……そうすると、だれか、あなた方のうちで、たぶん、すぐに、こうたずねる人があ
るでしょう。しかし、ソクラテス、君の仕事は何なのか？ どこから、君に対する、こ
ういう中傷が生まれてきたのだ？ なぜなら、君という人が、ほかの人のしない、よけいな
ことは、何もことさらにしていないのに、それなのに、こういう噂や評判がたつはずは、
きつとたぶん、なかっただろう。（中略）、だから、どうか、君のしていることが何なの
か、われわれに言ってくれたまえ。（中略）、——こう言う人があるなら、わたしはそれ
を、もつともない分であると思う。だからわたしも、いったい何がわたしに、こ
ういう名前をもたらし、こ
ういう中傷を受けるようにしたのかを、諸君にはつきりとわかるよう
にしてみましよう。……」（20c～d）

ここで、最も大事な文章は、すなわち、「……いったい何がわたしに、こ
ういう名前（つまり知者という名前）をもたらし、こ
ういう中傷を受けるようにしたのかを、諸君にはつきりとわかるようにしてみましよう」という箇所である。それでは、なぜ、この箇所が最も大事になるのかと言えば、それは、この箇所を説明するためにこそ、ソクラテスは、例の、いわゆる「デルポイの神託」の話を持ち出すことになるからである。

つまり、例の「デルポイの神託」の話というのは、一つは、「わたしの知恵について、それがまたどうい
う種類のものであるか」を説明するためと、もう一つは、「わたしに対する中傷が、いったいどこから生じたのか」、その起源を説明するためのものだったわけである。それは、一体、どうい
うことを意味するのかと言えば、それは、つまり、「わたしに、知者という名前をもたらしたのも、また、わたしに対する中傷が生じるようになったのも、まさに例の『デルポイの神託』にその起源があるのだ」ということを、はっきりと公言していることになるわけである。逆に言えば、「デルポイの神託」以前は、まだソクラテスは、広くアテナイの人たちから「知者」とは思われていなかったし、また、それほどの「中傷」も受けてはいなかったことになるかと思う。（もちろん、友だちや仲間たちの間では、ソクラテスは、すでに「知者」としてよく知られていただろうが……。）

つまり、ソクラテスは、「デルポイの神託」以後、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、政治家を初めとして、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはつきりと自覚させるような活動をしたために、それを見ていた多くの人たちから、ソクラテスという人物は、いわゆる「知者」であるという噂や評判が立つようになったと同時に、もう一方では、その対話相手の「無知」をはつきりと暴露し、それを自覚させるようなことをしたために、その対話相手やその仲間たちから非常に嫌われ、憎まれるような結果になってしまったわけである。（つまり、この二つのものは、ほとんど同時に進行して行ったということである。このことも決して忘れてはならない重要な要^{ポイント}点なのである。）

このことについて、ソクラテス自身は、次のように語っている。

つまり、こういう詮索をしたことから、アテナイ人諸君、たくさんの敵意がわたしに向けられることになってしまったのです。しかもそれは、いかにも厄介至極な、このうえなく耐えがたいものなのでして、多くの中傷もここから生じる結果となったのです。しかし名前は、知者だというように言われるのです。なぜならば、どのようなばあいにおいても、わたしが他の者を何かのことでやりこめたりすると、そのことについてはわたし自身は知恵をもっているのだと、その場にいる人たちは考えるからなのです。」(23a)

つまり、ソクラテスという人は、あの例の「デルポイの神託」以前は、それほどの「中傷」はまだ受けてはいなかったことになる。そして、耐え難いほどの「中傷」を受けるようになるのは、まさに「デルポイの神託」以降であり、それは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうては、相手の「無知」を暴露し、それを相手に自覚させるようなことをしたからであろう。だとすれば、それ以前は、そのようなこと、つまり、ソクラテスは、若い頃からいろいろな人たちと好んで「対話（議論）活動」を活発に行なっていただろうが、しかし、それは、あくまでも人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究にこそ、重点が置かれ、いわゆる「デルポイの神託」以後のように、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはつきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていないことになるのだろう。つまり、いわゆる「デルポイの神託」以前のソクラテスは、気心の知れている仲間（友人）たちを初めとして、いろいろな人たちと親しく「対話（議論）活動」を行なっていただろうが、しかし、それは、いわゆる「デルポイの神託」以後のように、無限（かつ無制限）に拡大されたものではなかったとともに、その「対話（議論）活動」の目的も、あくまでも人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究にこそ、その重点が置かれ、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはつきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていないことになるのだろう。だからこそ、それほどの「中傷」を受けることもなかったわけである。もちろ

ん、全くなかったわけではないだろうが、それほど大したものではなかったのだろう。ところが、「神託」以後は、何らかの「知識を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であれ、もう手あたり次第に、つまり、無限（かつ無制限）に次から次へと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうようになるわけだが、それは、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究のためだけではなく、それと同時に、もう一つの目的（それは、「デルポイの神託」のもう一つの隠された真意）でもある、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようなならば、そうではないのだと、相手にはつきりと自覚させるようなことをしていたので、その対話相手やその仲間の人たちから、実に様々な「中傷」を受けるようになったわけである。

つまり、「デルポイの神託」以前と、それ以後では、明らかに「その行動範囲とその目的」がはつきりと違って来ることは、全く疑いようがないわけである。つまり、「神託」以前は、ある程度、限られた人たちと「対話（吟味）活動」を行なっていたということである。それは、まず気心の知れている仲間（友人）たちを初めとして、それ以外に興味や関心を持った人たち（もちろん、その中には知識人もいれば、若者たち、その他の人たちも数多くいただろう）が、大体、そういう人たちを中心として親しく「対話（議論）活動」を行なっては、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究を行なっていたのだろう。しかし、もう一方の相手の「無知」を暴露し、それを相手にはつきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていなかったのだろう。だからこそ、それほど「中傷」を受けることもなかったわけである。

ところが、「神託」以後は、その対話相手が無限（かつ無制限）に拡大されることになるとともに、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究だけではなく、それと同時に、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはつきりと自覚させるようなことが、もう一つ付け加わって来るわけである。つまり、何らかの「知恵を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であるを問わず、積極的に「対話（吟味）活動」を行なうようになるわけである。そして、「神託の真意」がはつきりとわかった時点からは、さらに朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っては、そこでいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっては、お互いの「知の状態」をできるだけ徹底的に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようなならば、そうではないのだと相手にはつきりと自覚させるようなことを、いわば毎日の「日課」のようにするわけである。もちろん、それは、ソクラテス自身そうすることが、「神からの絶対的な命令」であると固く信じていたからであるとともに、「知を愛し求めてやまぬ心（魂）そのもの」が、まさにソクラテスをしてそのような活動を長年にわたってさせるようになって行くのだろう。

そのことについては、ソクラテス自身、次のように話をしている。

ところで、わたしがまさに、神によってこの^{ポリス}国都に与えられたような者であるということについては、つぎのようなどころから、諸君のご理解が得られるかもしれない。すなわ

ち、わたしは、すでに多年にわたって、自分自身のことはいっさいかえりみることもせず、自分の家のこともそのままかまわずに、いつも諸君のことをして来たということは、それも、私交のかたちで、あたかも父や兄のように、一人一人に接触して、魂(いのち)を立派にすることに留意せよと説いてきたということは、人間だけの分別や力でできることとは見えないからです。」(31a^①)

もちろん、これは、ソクラテスの「哲学遍歴」(つまり「哲学の実践」)のことをいっているわけだが、ここで最も大事なことは、つまり、「……わたしは、すでに多年にわたって、自分自身のことはいっさいかえりみることもせず、自分の家のこともそのままかまわずに、いつも諸君のことをしていたという……」ところである。つまり、ソクラテスの「哲学遍歴」(つまり、毎日、街頭に出て、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話」≪吟味≫活動)を行なうのは、相手の「無知」を自覚させるようなことは、一体、いつ頃から始まったのかと言えば、それは、もちろん、例の「デルポイの神託」以降である。それでは、その「デルポイの神託」とは、いったいソクラテスが何歳の時だったのか、という問題が、新たに大きく浮かび上がって来ることになるかと思う。

それは、一般的には「三十五歳前後」(或いは「四十代の前半ぐらい」)ではないかと考えられているものである。もし、そうだとすれば、ソクラテスは、非常に早くから「神からの絶対的な命令」という極めてはっきりとした使命感を持って、その後、約三〇〜三十五年間ぐらい、街頭に出て、いろいろな人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていたことになるということである。

例えば、これは、まったく個人的な意見になるが、恐らく、十代、二〇代の若い時期に、極めて旺盛な「知的遍歴」を積み重ねた若いソクラテスは、やがて三〇歳前後ぐらいになると、若いソクラテスの「内的世界」もほぼでき上がってきていただろう。そして、その頃から、後年のソクラテスらしい「対話(吟味)活動」が出てきて、それゆえ、ソクラテスと親しく「対話(議論)」を行なうような人たちは、ソクラテスという人物に対して、それなりに一目おくようになって来たのだろう。もちろん、友人や仲間たちの間では、すでに誰よりも抜けて優れていたに違いなく、それでは、どのくらい優れているのかと思つて、わざわざデルポイの「アポロン神殿」まで聞きに行ったのではないだろうか。つまり、めきめきとその頭角を現わして来たまだ若いソクラテスに対して、カイレポンは、非常に驚嘆して、それゆえ、わざわざデルポイまで出かけて行って、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるかどうか」ということをたずねたのだろう。つまり、そのような行動をするのは、その人がまだ若い時期であることが多く、それゆえ、カイレポン自身がまだ若い時期のころの話ではないかと思う。

そして、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるかどうか」という問いかけをしたということは、少なくともカイレポン自身は、ソクラテスこそは、誰よりも優れた「知者」に違いないと思ひ込んでいたのだろう。そうでなければ、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるか」などという問いかけをするはずがない。つまり、カイレポンは、ソクラテスこそは、誰よりも優れた「知者」に違いないと思ひ込んでいて、それを「確かめる」ために、わざわざデルポイまで出かけて行って、たずねたことになるのだろう。

そして、ソクラテスは、その「デルポイの神託」の話聞いてから、なぜ、そのような

「謎かけ」をして来たのか、「長いあいだ、思い迷う」ことになるわけだ。それでは、その「長いあいだ」とは、一体、どのくらいの期間なのか？ 例えば、二、三週間ぐらいなのか？ それとも一か月ぐらいなのか？ あるいは三か月ぐらいかかったのか？ もちろん、その答えは、まったくわからない。ただ推測するに、早ければ、二、三週間、意外に一、二か月ぐらいの歳月が流れたのかも知れない。というのも、ソクラテス自身、「……長いあいだ、いったい何を神は言おうとしているのであろうかと、わたしは思い迷っていたのです。そして、まったくやつのことで、その意味を、つぎのような仕方、たずねてみることにしたのです。……」という言葉の感じと、もう一つは、「……ぼくという人間は、自分でよく考えてみて、結論として、これが最上だということが明らかになったものでなければ、ぼくのうちの他の「感情や欲望などの」いかなるものにも従わないような人間なのであって、これは今に始まったことではなくて、いつもそうなのだ。……」（『クリトン』46b）という性格からの推測である。

次に、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ人たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、相手の「無知」を暴露するようになるわけだが、やがて、その「神託のもう一つの真意」がはつきりと分かるようになるまでには、どのくらいの歳月が流れたのだろうか？ それもまったくわからない。ただ思うに、たずね歩いた期間をも含めて、早ければ、一、二か月、「神託」の話を聞いてからでは三、四か月ぐらいではないかと思う。というのも、最初の政治家との「対話（吟味）活動」の段階から、すでに相手の「無知」を暴露するような行動になっているとともに、次の作家との「対話（吟味）活動」の時にも、すぐにでも相手の「無知」を見抜いているのを見ると、それほど多くの時間はかかっていないのではないかと思う。そして、今度は「神からの絶対的な命令」という極めてはつきりとした使命感を持って、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っては、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにするわけである。（もちろん、どのくらいの時間がかかったかはあくまでも憶測であり、それゆえ、これという確証はどこにもないわけである。）

ただ、プラトンの『カルミデス』という著作のなかで、ポテダイアの陣地から帰ったばかりの三十七歳のソクラテスは、早々に相撲場すもうばに出かけて行き、そこで十五歳のカルミデスという若者に出逢うが、その若者の言葉に、「……なにしろ、わたしと同じ年ごろのものたちは寄るとさわると、あなたの方がうまさでもちきりですし、それに、よく覚えています。まだ子供でしたが、あなたがこのクリティアスといっしょにおられるところを、お見かけしたことがありますから。……」（156A）という言葉信じらるならば、三十七歳のソクラテスは、すでに若者たちの「話題の中心」になっていたことになるわけである。だとすれば、遅くとも「三十五歳前後」にはすでにソクラテスは街頭に出て、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていたことになるかと思う。（そして、若い人たちの間で話題になっていたものは、ソクラテスの日頃の言動や戦場での活躍、その他、そういういろいろなものが含まれていたことになるのだろう。）

*

*

第二部

ソクラテスの「没我的思考」

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第二部

②ソクラテスの「没我的思考」

- 一、 二つの「思考方法」
- 二、 書物との対話
- 三、 本来の「哲学的問答法」
- 四、 大学生の場合
- 五、 車の両輪
- 六、 智を生めない者
- 七、 結び

ソクラテスの「物想い」

* 参考文献

ソクラテスの「没我的思考」

ソクラテスの「没我的思考」について

それは、プラトンの『饗宴』という著作のなかに出てくるものであり、その内容は、次のようなものである。——つまり、前四一六年に、アガトンというまだ若い悲劇作家が、いわゆる「悲劇コンクール」で見事に優勝したので、それを祝うための祝宴が、アガトン邸で開かれることになり、その祝宴にソクラテスも招待を受けていた。そこで、ソクラテスは、彼には珍しく「沐浴ゆあみあがりにサンダルを履はいた」かつこうで、その宴に出かけて行くこうとしているところに、ちょうどアリストデモスという人とひよっこり出逢うことになり、それじゃあと、ソクラテスは、彼（アリストデモス）を誘って、二人でアガトン邸へと向かうことになるわけである。

そして、その道の途中で、次のようなことが起こるわけである。つまり、「……まあ、こういったことを話しあってから、ぼくらは出かけたわけだ。ところが、ソクラテスは、途中で、なにか考えごとにふけて、遅れてしまい、ぼくのうしろのほうを歩いている。で、ぼくが待っていると、さきに行ってくれ、と頼むのだった……」。そこで、アリストデモスは、一人でアガトン邸に着き、それから召使いに案内されて、中に入って行くと、アガトンが、「……おお、アリストデモス！ これはちょうどいいところに来てくれた。さあ、いっしょにご馳走を食べよう」と言いながら、「……それにしても、どうしてソクラテスを連れて来てくれなかったのかね？」と尋ねると、いや、実はソクラテスに誘われて、一緒にやって来たのだが、一体、どこにいるのだろうということになり、そこで、アガトンは、召使いにソクラテスを探してお連れするように告げ、やがて、その召使いが帰って来て、次のように伝えるわけである。「……ソクラテスさまはあそこで、隣りの車寄せのなかにひっこんでしまつて、そこにたたずんでおられます。わたしが呼びしましても、来ようとはなさりません。……」

それを聞いたアガトンは、「……おかしな話だな、まったく。まあいい、ともかく、あなたの方をお呼びしてくるのだ」と言ったので、アリストデモスは、「……いや、それはよしとくれ。あの人は、そのままにしておいてやってくれ。あれは、あの人の癖の一つで、ときどき、どこでもおかまいなしに、道を逸それては入りこみ、そこにたたずんでしまうのだよ。どのみち、すぐここにやって来るだろう。ぼくはそう思う。だから、邪魔を入れないで、そつとしておいてやってくれたまえ。……」という言葉を受け入れて、アガトンとその招待客たちは、みんなでご馳走を食べはじめることになるわけだ。

ところで、問題のソクラテスは、いつもほど長い道草はくわず、食事が半分ほどすんだころにやって来た。そこで、アガトンは、たまたまいちばん末席に一人で横になつていたので、彼に言った。「……どうぞこちらへ、ソクラテス、ぼくの隣りに横になつたまえ。そのおまけとして、あなたのからだに触れることによつて、あの車寄せであなたを訪れた知恵を、ぼくにも享うけさせてくれたまえ。あなたがそれを、そのとき見つけたして、げんにいまもっていることは、言うまでもないことだからね。でなかつたら、あなたは、そのままそこを立ち退ひくなど、どうしてするものですか。……」（『饗宴』175）

*

*

さて、引用が長くなつたが、しかし、この引用部分には、極めて興味深いものがあるので、それについて、少し考えてみたいと思う。まず、アガトン邸へと向かうその途中で、

ソクラテスは、「……なにか考え」ことにふけて、遅れてしまい、ぼくのうしろのほうを歩いている。で、ぼくが待っていると、さきに行ってくれと頼むのだった。……」という箇所がある。この部分は、道を歩いている途中で、ソクラテスの「頭の中」に何か「ある思いなり考えなり」が浮かんできたということであり、それ自体は、なにも不思議なことではなく、誰にもよくあることではないかと思う。そして、その「思いなり考えなり」に気を奪われれば、当然のことながら、その歩む足の速度も遅くなってくるわけである。そこで、その遅れたソクラテスを待っていると、「……さきに行ってくれと頼むのだった」ということになるわけだ。

ここまでのところに、それほど不自然なところは特にないように思うが、しかし、ここで留意しなければならないことは、次のようなところからである。——つまり、ソクラテスは、アガトンの邸での祝宴に向かう途中であるにもかかわらず、そのようなことはすっかり忘れてしまったかのようになり、やがて、「……車寄せのなかにひっこんでしまい、そこでずつとたまたみながら、いわゆる『没我的思考』に入ってしまった」ということである。しかも、アガトンの召使いが、お呼びしましても、「……来ようとはなさりません。……」ということになるわけだ。

これは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？——まず、考えてみなければならぬことは、ソクラテスの「頭の中」に浮かんできた「ある思いなり考えなり」というものは、一体、どういうものかということである、つまり、ソクラテスにとつてごく当たり前の「思いなり考えなり」であれば、何もわざわざ立ち止まってまで、いわゆる「没我的思考状態」に深く入っていく必要性などどこにもなかっただろう。というのも、もしごく当たり前の「思いなり考えなり」の時にも、いちいち立ち止まって、「もの思いに耽ってしまう」というのであれば、ソクラテスは、年がら年中（毎日毎日）、絶えず立ち止まって「もの思い」に耽っていなければならないことになるからである。それゆえ、ソクラテスの「頭の中」に浮かんできた「ある思いなり考えなり」というのは、ソクラテスをわざわざ立ち止まらせて、深い「思考（思索）状態」（つまり「沈想」状態）にまで耽入（ふけ）させるだけの何か「魅力的なもの（或いは興味や関心をそそられるもの）」でなければならぬだろう。

ソクラテスのようにいろいろな「問題」（特に人間の諸問題）について絶えず「ものを考えている」ような人間の「頭の中」には、いつもそれらに対する様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられているものである。——それは、例えば、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、政府とは何か、統治者とは何か、その他、そういう問題をいつも数多く蓄えていると同時に、そのような問題自体が、そもそもどれもこれもすぐに答えが得られるような問題ではなく、また、たとえある「答えや結論」などを得たとしても、やがて、その「答えや結論」に対して幾つかの「疑問や問題点」などが生じてきて、さらにいろいろな角度からその「答えや結論」をより厳密に吟味（検討）し直して、新たな「答えや結論」などを出すというようなことを、何度も何度も繰り返して行なわざるを得ないものである。

それゆえ、ソクラテスの「頭の中」には、いつも様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられていたということになる。そして、そのような様々な「疑問や問題点」などにつ

いて、意識的にしろ、あるいは、知らず識らずのうちにしろ、あれこれ考えているうちに、ふと何らかのきっかけから、その「疑問や問題点」などがうまく解けるような「考えや着想（ヒント）」などが、ふと浮かんで来ることがよくあるわけである。そのような時には、その人自身思いもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などを得て、少なからず心がときめく（高揚）して来るのを感じながら、その魅力的な「考えや着想（ヒント）」などをもとにして、徹底的に考えを深めていくことによって、今までどうしても（或いはなかなか）思うように解けなかった「難題」などが、一気に解決されることがよくあるわけである。それが、すなわち、「直知・直観」であり、そのようにして実に様々な人類的な「発明、発見、創造、その他」などがなされてきたということである。

例えば、ニュートンは、リンゴの木の実が落ちるのを見て、いわゆる「万有引力の法則」を発見したという（その真偽はともかく）、非常に有名な逸話（エピソード）が残されているわけであるが、それも、もともとニュートンの「頭の中」には、力学、その他に関する様々な「疑問や問題点」などが常に蓄えられていて、それらについて、いつも真剣に考えていたからであろう。そして、そのような力学、その他に関する様々な「疑問や問題点」などを何とか解明しようと本格的な「思考（思索）活動」を無限に積み重ねていくうちに、ある日、ある時、ふとした何らかのきっかけからも、「あつ、そうか！」というような感じで、その人自身にとっても思いがけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などがふと浮かんで来て、一気にその「難題」が解決されることにもなるということである。それと同じように、ソクラテスの「頭の中」には、いつも人間の諸問題に関する様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられていて、それらについて、いつもあれこれ考えているような「精神状態」だったろうと思うが、そのようなソクラテスであってみれば、何かの途中でふと思ひもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来ることも、かなり頻繁にあったのではないかと思う。そのような時には、ソクラテスは、そのままその場にたたずむような状態になって、いわゆる「没我的思考」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入ってしまうという癖があったということである。——それでは、その癖は、一体、どういうことを意味するのかと言えば、それは、取りも直さず、ソクラテスにとつて何か魅力的な「考えや着想」などに襲われた時は、何よりもそれを最優先させるという、「思考（思索）第一主義」（或いは真理探究第一主義）の真の愛知者（つまり真知を愛し求めてやまない人）であったということになるわけである。

ふつう、われわれの場合は、何かの途中で思いもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来た時には、それを忘れないようにすぐに何かメモ帳などに書き留めておき、そして、あとでそのことについてあらためて「考え直す」ということをよく行なったりするものである。ところが、ソクラテスの場合には、何らかの途中で思いもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来た時には、それを何か紙（パピルス）などに書き留めて、あとでそれを「考え直してみる」というような方法を採らずに、その場でもうどんどん考え深めていき、そして、例の「没我的思考」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入ってしまうわけである。つまり、ソクラテスの場合には、ある魅力的な「考えや着想」などが浮かんで来た時には、どこでももうおかまいなしに、道を逸れては入りこみ、そこにたたずみ、そして、そのずつと立ったままの状態でどんなものを考え深めていき、そして、何らかの結論が得られるまでは徹底的に「考え続け」

て、中途半端なところでは「決してやめない（或いはやめられない）」という最大特徴があったわけである。そうでなければ、どうしてあのように極端に長い時間ずっと立ち続けるということが起こり得るだろうか、起こりようがないのである。つまり、中途半端なところで思索をやめるということができないからこそ、あのように極端に長い時間ずっと立ち続けるようなことになってしまうということである。

このソクラテスの「集中力」（思索的集中力）には、何か人並みはずれたところがあつたに違いない。そうでなければ、その場にそのまま立ちつくして、あのような「没我的思考状態」を何時間（時には何十時間）も続けられるはずもないからである。——つまり、ひとたび「思考（思索）状態」に入ったならば、ソクラテスの場合には、まわりのことはあまり（或いはほとんど）気にならなくなってしまう、その「思考（思索）活動」に深く没頭し続け、そして、何らかの結論（つまりソクラテス自身、もうここまででよいだろうと納得のいくような地点まで）到達するまでは、徹底的に「考え続け」て、中途半端なところでは「決してやめない（或いはやめられない）」という、極めて強い「精神力」（思索的集中力）を持ち合わせていたことになる。そうでなければ、何も長い時間ずっと立ちつくして、「物思い」に耽り続ける必要などなく、適当なところでやめて、あとは自分の家に帰ってから、じっくり考えても少しも構わないわけである。ところが、ソクラテスの場合には、そういうところが全くなかったということである。それは、最初の引用文のなかにも、次のような形で記述されているものである。つまり、「……どうぞこちらへ、ソクラテス、ぼくの隣りに横になりたまえ。そのおまけとして、あなたのからだに触れることによつて、あの車寄せであなたに訪れた知恵を、ぼくにも享けさせてくれたまえ。あなたがそれを、そのとき見つけたして、げんにいまももっていることは、言うまでもないことだからね。そうでなかったら、あなたは、そのままそこを立ち退くなどどうしてするものですか。……」（『饗宴』175）

一、二つの「思考方法」

さて、ソクラテスには、大きく分けて、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があったということである。——その一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねることによつて、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法である。そして、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、そして、いわゆる「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っては、物事の「真実、真理、その他」などをどこまでも深く探究するという方法である。——前者は、ソクラテスの有名な「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）であり、後者は、いわゆる「自問自答の世界」（つまり「没我的思考」方法）である。そして、この「二つの方法」は、極めて対照的なものになるわけである。

というのも、前者は、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねるのに対して、後者は、全く正反対に、他人から完全に離れ、一人きりになり、孤独「物思い」に耽入するという方法だからである。すなわち、ソクラテスにはいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」をしている時の非常によく知られている姿と、もう一つ、これは意外と忘れられがちであるが、他人から完全に離れ（つまり他人の介入

を全く寄せつけず)、一人きりになって、いわゆる「没我的思考状態」(つまり「沈想」状態)に深く溶け入っている姿という、この二つの姿があったということである。

そして、前者の場合には、ソクラテスが、一体、どういう内容のことを話していたかは、それを直接、見聞きしている人たちには、よく知られていたものであるが、しかし、後者の方は、ソクラテスが、一体、どういう内容のことを「瞑想(思索)」していたかは、誰にも分からないものである。とは言え、何も特別のことを考えていたはずもなく、やはり、恐らくは「人間の諸問題」に関する様々な「疑問や問題点」などをより深く考えていたことになるのだろう。あるいは時には「自然の問題」についても考えていたかも知れない。ただ、それは、ソクラテス自身の内部に留まり、他人との対話(議論)の題目とはしなかったということもあり得ないことではない。というのも、ソクラテスほどの知的好奇心の旺盛な人であつてみれば、何かの折りに、自然の問題についても孤独^{ひとり}考えることがあつても何も不思議なことはないからである。また、『パイドン』という著作のなかで、作中のソクラテスは、——若い時に、驚くほど「自然の問題」に熱中することがあつたが、やがて、それに失望して、あるいはその研究が自分には向いていないということから、いわゆる「人間探究」に専念するようになったということも、十分に考えられることである。

それはともかく、ソクラテスには、いわゆる二つの「思考(思索)方法」があつたということである。(むろん、本来ならば、それに加えて、もう一つ、「ものを書きながら考える」という方法があるかと思うが、ソクラテスの場合には、それをほとんど行なっていない)。逆に、プラトンの場合には、一生涯、それを行なつた人である。さて、ソクラテスにとつて、その二つの「思考(思索)方法」には、一体、どのような「違い(或いは特徴)」があつたのだろうか? この問題についても、少し考えてみたいと思う。

まず、他人と直接「対話(議論)」をすることによって得られる利点には、一体、どのようなものがあると言うのだろうか? まず、考えられることは、やはり、一人で思考(思索)している時には、どうしても「独断」(一人よがりの世界)に陥りやすいものである。一方、相手と直接「対話(議論)」を積み重ねていく場合には、何かおかしなところや間違つたところがあれば、それをすぐに相手から指摘されるので、その点、一人よがりの「独断」に陥ることが少ないとともに、対話相手には、自分とはまた違つた「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、そして、様々な体験や経験、その他」などを持ち合わせているわけであるから、それらに触れることによって、「ああ、なるほど、そういうものの見方、とらえ方、考え方、あるいは生き方もあるんだなあ」という感じで、新しい刺激を受けることも多くなるわけである。それゆえ、いろいろな分野(領域)の人たちと親しく「対話(議論)」を積み重ねることは、とかく自分よがりの狭い「ものの見方、とらえ方、考え方、あるいは生き方」に深く陥りやすい状態から脱却して、いろいろな角度から物事をとらえ、考えられるようになるということである。

ところで、ソクラテスが実際に行なっていた「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」とは、一体、どういうものかと言えば、それは、例えば、正義とは何か、勇氣とは何か、あるいは不正とは何か、というように、ある「題目(テーマ)」について、対話相手と直接「一問一答の形式」でいろいろな角度から、その問題について、お互いに「対話(議論)活動」をどこまでも徹底的に深めていき、そして、何とかして「最終的な答え」(つまり「真知」)を得ようとするためのものであるが、しかし、実際にはなかなか「最

最終的な答え」(つまり「真知」)が思うように得られずに、多くは「行き詰まり状態」で終わってしまうことが非常に多かったということである。

とくに晩年のソクラテスは、毎日のように、朝早くから遊歩道や体育场、また、人が多く集まる広場(市場)や街頭、その他、もういたるところに出かけて行つては、一日じゅう、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」)を行なうことを、いわば毎日の日課のようにしていたわけである。それでは、なぜ、そのようなことを行なっていたのかと言えば、それは、もちろん、物事(特に人間の諸問題)の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するためであったとともに、もう一つは、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだということ(つまり相手の「無知」≡様々な思い違い)などを、はっきりと自覚させるためであったということである。

例えば、相手の人が「勇氣について」よく知っていると考えているようならば、ソクラテスは、その人と「勇氣の問題」について積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていくわけだが、その場合、ソクラテスは、いろいろな角度から「相手の答え」の矛盾点を徹底的についていき、そして、相手の人がついに「答えに窮する状態」(つまり「行き詰まり状態」)にまで追い込むことによつて、相手の「無知」を自覚させるという方法である。それゆえ、ソクラテスが実際に行なっていた「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」)というのは、相手の「無知」を自覚させるための方法としては、非常に有効なものではあるが、しかし、一方、いわゆる「勇氣とは何か」という「最終的な答え」(つまり「真知」)を得ることは、むしろ失敗をしていることになるのである。

それでは、なぜ、相手との直接的な「対話(吟味)活動」では、なかなか思うような「最終的な答え」(つまり「真知」)を得ることができにくいのだろうか？ 例えば、ある「題目(テーマ)」をもとに、よくいろいろな「討論会」などが開かれたりするが、そのような場合にも、各人がそれぞれ「自分の考え」を言い合うばかりで、なかなか「最終的な答え」は得られないままで終わってしまうことが非常に多いわけである。もちろん、それにもいろいろ理由があるかと思うが、その一つの理由としては、もともとその「題目(テーマ)」そのものが、これという「最終的な答え」を得ることが極めて難しい(或いは「ほとんど不可能に近い」)ものであるということもあるのだろう。

そして、もう一つの大きな理由としては、次のような極めて大事な問題が含まれているのである。つまり、他人との直接的な「対話(議論)活動」というのは、お互いにいろいろな角度から徹底的に「対話(議論)活動」を積み重ねながら、その「議論」を先へ先へと詰めていき、そして、終には「最終的な答え」(或いは「最終的な結論」)をなんとか得ようとするものである。——それは、例えば、長い階段を一步一步上りつめていき、そして、その階段を上りつめたところに、いわゆる「最終的な地点」(或いは「最終的な答え」)があつて、そこに何とか辿り着こうという試みにも似たものである。ところが、実際には、そのような他人との「対話(議論)活動」では、なかなか「最終的な地点」(或いは「最終的な答え」)へは辿り着けないことが非常に多いわけである。

それでは、なぜ、そのようなことになるのか？ もちろん、それにもいろいろ理由があるかと思うが、その大きな理由の一つとして、それは、他人との「対話(議論)活動」と

いうのは、最初から最後まで、あまりにも意識的かつ「論理的（知性的）思考」だけに終始しているために、どうしても越えられないある限界が生じてくるからである。それゆえ、なかなか「最終的な答え」（つまり「真知」）を得ることができにくいという、いわゆる「行き詰まり」という状態に深く陥ってしまったことが非常に多いわけである。

それでは、どうしたらわれわれ人間は、それらの「行き詰まり状態」を打開し、突破して、最終的な「答え」（つまり「真知」）をとらえることができ得るのかと言えば、それこそ、ソクラテスが実際に行なっていた、もう一つの「思考（思索）方法」である、あの例の「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入って、物事の「真実、真理、その他」などを、まさに「直知・直観」するという方法なのである。

つまり、他人との「対話（吟味）活動」というのは、いわゆる「論理的（知性的）思考」方法であるのに対して、もう一つの「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）というのは、むしろある種の「超論理的（超知性的）思考」方法であり、それこそ、まさに「直知・直観」というものをもたらすものである。そして、他人との「対話（吟味）活動」というものは、まさに一歩一歩階段を上って行き、そして、最終的に或る「真実・真理」へと到達しようとする方法である。むしろ、そのような方法でも或る「真実・真理」をとらえることはでき得るだろうが、しかし、多くの場合、そのような方法だけでは無理があり、それは、例えば、或る「難題」に対して、長い間、ああでもないこうでもないという感じで、意識的かつ「論理的（知性的）思考」を何年も積み重ねながらも、なかなか思うような答えを見い出せず、悶々としている「心的状態」にも似ていて、そのような「行き詰まり状態」を越えるためには、むしろ独りぼんやりと「物想い」（あるいは「空想」を樂しむ）ような、まさに「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け込んでいく「心的状態」になっような時にこそ、ある日、ある時、ふとした何気ないきっかけから、「あつ、そうか!」と、想いもかけないような感じで、長い間、どうしても解き得なかった「難題」が、一気に解けるような決定的な「着想やヒント」などを得ることがよくあるが、それこそは、まさに「直知・直観」というものになるということである。

もちろん、そのどちらの「思考（思索）方法」も極めて大事なものであるとともに、それはもう切っても切れないほどの極めて親密な「クルマの両輪」の「とき関係なのである。ただ、実際にわれわれ人間が或る「真実・真理」をとらえるのは、ほとんどの場合、他人との直接的な「対話（議論）活動」などによってではなく、もちろん、そういう場合もあるだろうが、しかし、それは、あまりにも「論理的（知性的）思考」に終始するがゆえに、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが起こりにくい「心的状態」なのである。つまり、或る「真実・真理」をとらえるためには、階段を一歩一歩上りつめて行くような「論理的（知性的）思考」方法だけでは、どうしても越えられないものがあり、その越えられないものを越えて、或る「真実・真理」を一気にとらえるためには、どうしても「精神の飛翔」というようなものが必要不可欠になって来るということである。そして、その「真実・真理」をとらえるための「精神の飛翔」というようなものをもたらすものが、まさに「没我的思考方法」であり、そのような「沈想状態」に深く溶け入っているような時にこそ、ある日、ある時、ある何らかの「切っ掛け」から、一気に、或る「真実・真理」などを「直知・直観」することが非常に多いということである。そして、そのような「没我的思考状態」から、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが生じて来て、或る「真実・

「真理」などを一気にとらえるというものこそ、他人と直接的な「対話（議論）活動」などをしていくような時の、いわゆる「論理的（知性的）思考」方法を超えて、ある種の「超論理的（超知性的）思考」方法になっている状態なのである。例えば、ゲーテは、次のようなことを言っている。「……偉大なものは、純真で、ひたむきで、夢遊病者のような創造力によってのみ産み出されるものである。……」と。（「ゲーテとの対話」下）

それゆえ、われわれ人間が、物事の「真実・真理」をとらえるのは、いわゆる「論理的（知性的）思考」の無限の積み重ねをその大きな基盤としながらも、それだけではどうしても越えられないものがあり、それに加えて、自問自答による「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）にどこまでも深く溶け入ることによってこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、未だ解明されていない人類の「難題」（難問）の或る「真実・真理」などを、その人の「思惟界」で、まさに「直知・直観」することができ得るということである。

それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というのは、一般には、他人との直接的な「対話（吟味）活動」のことだけになっているが、しかし、実際には、もう一つの自問自答による「没我的思考方法」も、自分を相手としての「哲学的問答法」であり、それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というのは、それら両者を合わせ（合体させて）こそ、初めて、成立可能となるものであるとともに、ソクラテスが実際に行なっていた「真知」を愛し求める「愛知学（哲学）」（その手段としての「哲学的問答法」）というものは、まさにそれら「両者」（つまり他人との「対話」と自分自身との「対話」）との合体からこそ、成り立っていたということである。

二、書物との対話

それに加えて、例えば、誰かの「書物」を深く読むというようなことも、直接、相手と「対話（議論）活動」を行なうものではないが、しかし、間接的には、相手の「考えや思想」（いわば「魂」）とも深く交わることになるので、それも極めて「広い意味」においては、一つの「哲学的問答法」ということになるのかも知れない。

例えば、或る優れた人物の「考えや思想」というものを、ほんとうに知りたい（或いは疑問を解決したい）と思うならば、その優れた人物と直接、会って、その人といろいろ親しく「対話（議論）活動」を積み重ねながら、直接、相手からそれらについて聞くのが一番よいことになる。しかし、そのようなことが思うようにできないならば仕方がない、まさに「次善の策」として、その人が「書いたものを読む」ほかはないのである。

例えば、ソクラテスやプラトンの「考えや思想」というものをほんとうに知りたいと思うならば、直接、ソクラテスやプラトンなどに会って、その人たちと納得がいくまで「対話（議論）活動」を何度も積み重ねることによって、ソクラテスやプラトンが、一体、どのような「考えや思想」を持っていたのかを、直接、聞くことができるわけだから、それこそは、まさに「最上（最善）のもの」になるわけである。

しかし、ソクラテスやプラトンなどは、すでに二千数百年も前に死んでいるので、直接、会って、彼らから直接話を聞くということはもうでき得ない。それゆえ、われわれは仕方なく（つまり「次善の策」として）、プラトンやその他の人たちが書き遺した「著作（文

献)などを通して、ソクラテスやプラトンの「考えや思想」というものにめぐり逢い、そして、それをできるだけ厳密に理解しようとしているのである。そして、例えば、プラトンの数多くの「著作」を深く読み進んでいくうちには、この部分は、一体、どういう意味なんだろうか、また、ここは、どういうつもりで、このように書いたのだろうか、よく理解できない部分や分かりにくい部分などがいろいろと出てくることになる。それゆえ、プラトンが生存していれば、そのプラトンに実際に会って、「この部分は、一体、どういう意味なんですか？」と、納得がいくまで「対話(議論)活動」を積み重ねて、徹底的に聞くことができ、その結果として、「ああ、なるほど、私は、今まで違ったふうに理解していたが、しかし、実際は、そういう意味だったのですか」と、相手の「考えや思想」というものを、可能な限り、「正しく理解する」ことができ得るということである。

ところが、一方、「書物」というのは、こちらからいくら相手に問いかけても、いつも「同じ言葉」でしか返ってこないとともに、少しもこちら側の「疑問や質問」などに答えはくれないものである。そのために、たとえ同じプラトンの「著作」を読んでも、各人それぞれによって実に様々な「理解の仕方や解釈」などが無数に生じてきて、一体、プラトンは、本当はどういうことを言おうとしていたのか、その「真意」がいつまでも「曖昧のまま」になってしまふとともに、ひどい時には、作者の「真意」とはまったく正反対の意味で理解してしまうというように、読者に「中途半端に読まれた」のでは、作者の「真意」は、少しも「正しく伝わらない」という危険性も非常に高いわけである。しかも悪いことには、その読者自身は、何一つ厳密には「正しく理解」していないにもかかわらず、もうその作者の「考えや思想」というものを、何もかも理解したような気持ちになつて、自分は、すでにいろいろなことを知っている「知者」でもあるかのように自惚れてしまうという「二重の危険性」があるということである。それこそ、まさに「書物」というものがもたらす最大の欠点の一つになるかと思う。

それに加えて、もう一つの大きな欠点は、そもそも「書物」というものの中に書かれている内容というものからして、まさに生きた「言葉や知識」の「影」(つまり硬直化した「言葉や知識」に過ぎないということである。しかも、「……ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならぬ人々だけに話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取りあつかわれたり、不当にのしられたりしたときには、いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする。自分だけの力では、身をまもることも自分をたすけることもできないのだから」(275E)と、プラトン自身、『パイドロス』という著作のなかで特に強調しているところである。——つまり、「書物」というものの最大の欠点は、相手との直接的な「対話(吟味)活動」のように、その相手の「知の状態」に応じて、いくらでも臨機応変に一问一答の形式で、相手の人がほんとうに理解できるまで親身になつてとんとん生きた言葉を交えながら、親しく「対話(吟味)活動」を何度も積み重ねるようなことが少しもできないとともに、どのような人間に対しても、すべて同じ方法である一つの硬直化した「同じ言葉」で語りかけるだけであり、しかも、こちら側からの「質問や疑問」などには、なにひとつ答えてくれないというところにあるわけである。

一方、他人との直接的な「対話(吟味)活動」というのは、何よりも「生きた人間」と

「生きた人間」との直接的な「関わり（交わり）」である。しかも、その「生きた人間」というのは、誰でもこの世に生まれて今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などを内に宿している存在であるので、いろいろな分野の人たちといろいろな問題で親しく「言葉」を交わすことは、自分とはまた違った実に様々な「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、さらに様々な体験、経験、その他」などとめぐり逢うことになるとともに、それらからいろいろなことを学ぶことになり、それによって、とかく自分よがりの狭い独断的な考え方から、いろいろな角度から物事をとらえることができるようになるだろうし、また、何か知りたいことや疑問に思っているようなことがあれば、そのことをよく知っている専門家の人たちに直接聞けば、あれこれ丁寧に教えてもらえるものである。しかも、いろいろな人たちと直接的に交わされる「様々な言葉」（「生きた言葉」というのは、一般的に言って、お互いの「心の中」に直接的に入りやすいものであり、しかも、その言葉が心に染み入るような意味深い「生きた言葉」であれば、なおさらいつまでも、その人の「心の中」に保存されて生き続けることにもなるわけである。例えば、あの時のあの言葉が、あるいはあの時の誰々の言葉が、いつまでも「心の中」に残っていて、それが自分の人生に何らかの影響を与え続けているというようなことは、誰にもあることではないかと思う。――以上が、われわれ人間が一般に行なっている他人との直接的な「対話（問答）活動」であるとともに、そこから得られるごく一般的な特徴（長所）ということになるかと思う。

三、本来の「哲学的問答法」

むろん、プラトンが考えている本来の「哲学的問答法」（ディアレクティケー）というのは、あくまでも物事の「真実・真理」（例えば「正義とは何か」「勇気とは何か」「美とは何か」「善とは何か」、その他、それらの「真知」を得んがための徹底した「対話（吟味）活動」であり、それゆえ、一般的な「雑談や対談」のような「対話（問答）活動」とは、根本的に違ったものになるだろう。しかし、その根底には、いつも他人との直接的な「対話（問答）活動」の全般（すべて）が存在していることになる。そして、その全般（すべて）の直接的な「対話（問答）活動」の（ピラミット型図形）の最上部に位置する「哲学的問答法」というものが成立するためには、少なくとも一方は、真に優れた「魂」を内に宿している人でなければならない。――なぜなら、お互いがまだ未熟な「魂」同士であるならば、いくらお互いが真剣に「対話（吟味）活動」を積み重ねても、いわゆる物事の「真実・真理」などをとらえる方向へと「その思考を真に深めていくこと」はできにくく、どうしても様々な事物の「表面的な現象」のところをさまようような、そういう中途半端な「対話（吟味）活動」で終わってしまうことが非常に多いからである。

つまり、真に優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによってこそ、最初のうちは「無知」のような状態であった人も、相手の巧みな「話術（吟味）活動」に導かれて、その人自身だけではとてもそこまで深く入って行けないようなところまで、その「思考（思索）」を相手と一緒に深めていくことになり、そして、そのような親密な「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねていく過程において、様々な物事の「真実・真理」（つまり「真知」）へと可能な限り近づいていくことになるとともに、その真

に優れた「魂」から絶えず生み出される実に様々な「生きた言葉」が、もう一方の話し相手の「魂の中」に蒔かれ、植えつけられることになり、そして、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、その人の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがてはその人の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが生み出されてくるというように、心から心へ、魂から魂へ、「生きた言葉」や「生きた知識」、或いは「生きた思考方法」などが、可能な限り、正しく受け継がれていくものこそは、まさにプラトンが考えていた本来の「哲学的問答法」（ディアレクティケー）であるとともに、それこそは、まさに「最上（最善）のもの」であると考えていたものである。

例えば、ソクラテスやプラトンのような真に「優れた魂」と実際に親しく「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによって、相手の実に様々な「生きた言葉」が自分の「魂の中」に自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが生み出されて来るようなものこそ、まさに「最上（最善）のもの」ではあるが、しかし、実際にはそのようなことはもうでき得ないわけだから、次善の策として、プラトンの書き遺した「書物」（それは生きた言葉や思想の「影」をじっくりと深く読むことによって、間接的にはあるが、彼らの「考えや思想」とめぐり逢い、そして、彼らの「考えや思想」（いわば「魂」と自分の「考えや思想」（いわば「魂」とが深く交わつては、こちら側からの一方的な形にはなるが、彼らの「魂」と哲学的な「対話（吟味）活動」を行なうことにもなるということであり、これも極めて「広い意味」においては、一つの「哲学的問答法」ということになるのかも知れない。

それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」（ディアレクティケー）というものは、むしろ、優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」と、自分自身との「没我的思考方法」との両方を合わせ（合体させ）たものこそ、まさに最上なものであることは、すでに上述した通りである。それに加えて、例えば、様々な「書物」（例えば「哲学書」などを深く読んで、その優れた哲学者の「考えや思想」と深く交わることは、間接的ではあるが、その哲学者と愛読者との間に哲学的な「対話（吟味）活動」を生み出すことにもなるわけであるから、極めて広い意味においては、いわゆる「哲学的問答法」の一種になり得るものではないだろうか。——もちろん、本来の狭義においては、真に優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」こそは、まさに「哲学的問答法」になるわけだが、しかし、もっと拡大した広義においては、他の二者の場合も含めてよいものではないかと思う。——というのも、その拡大した広義の「哲学的問答法」こそは、われわれ人間が、日頃、物事の「真実、真理、その他」などを得るために実際に行なっている方法でもあるからである。

四、大学生の場合

例えば、ある大学生が、ある大学で「勉学（研究）活動」に励んでいるとする。その場合、その学生は、まず、様々な「講義」などに出席して、それぞれの担当の教授たちから、直接、いろいろな専門的な知識を学ぶことになる。そして、もしもその「講義」に出席して、その内容がよく理解できない部分や何か疑問に思っていることがあれば、直接、その

教授に質問をして、「この部分がよく理解できないんですが」と、自分がほんとうに理解できるまで何度でも質問を積み重ねては、それらの「疑問や問題点」などを解決しながら、その専門的な分野の理解などをより深めていくことになるかと思う。

そして、特に「演習(ゼミ)」の場合には、その指導の教授と学生との「関わり(交わり)」は、より親密なものになり、それゆえ、その「研究テーマ」に関わる様々な「問題点」などに対して、教授と生徒とが熱心に一問一答の「対話形式」で徹底的に「対話(議論)活動」を積み重ねながら、だんだんとその専門分野の知識や技術などをより深めていくことになるかと思う。そのように物事の「真実・真理」などを得んがために、教授(先生)と生徒(学習者)とが親しく「対話(議論)活動」を何度も積み重ねることによってこそ、生徒は、その「思考(思索)能力」をより深めることになるとともに、いわゆる「真知」を愛し求める愛知者同士の間には、自然と人間的な「親密さやつながり」なども生じて来るというのが、プラトンが考えている「哲学的問答法」というものになるわけである。

——つまり、真に優れた「魂」とめぐり逢い、その真に優れた「魂」と親しく「対話(議論)活動」を何度も積み重ねることによってこそ、相手の実に様々な「生きた言葉」が自分の「魂の中」にも自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉(知識)」などが数多く生み出されるようになる。そのようなものこそ、ソクラテスという先生からプラトンという生徒が直接、身を以って学んだ、いわゆる「哲学的問答法」であったとともに、そのようなものこそは、まさに「最上(最善)のもの」である、と、プラトンは考えているわけである。

次に、その大学生は、当然のことながら、自分が研究している「分野」(つまり「研究対象」)に関する実に様々な「専門書(資料)」などを数多く読みあさることになるかと思う。そして、「書物」を読むということは、確かにいろいろな知識を得るためのものではあるが、それと同時に、その作者の「考えや思想」(いわば「魂」と深く交わることもあり、そして、その作者の「考えや思想」(つまり「魂」とそれを読む読者の「考えや思想」(つまり「魂」と深く交わり、読者の「心の中」であれこれ「対話(吟味)活動」を行なうような形にもなるものである。むしろ、生きた人間との直接的な「対話(吟味)活動」こそは、第一ではあるが、しかし、一方、様々な「書物」との「関わり」(交わり)も決して軽く見ることはできないのである。——なぜなら、どのような人間とめぐり逢い、そして、その人たちからどのような影響を受けるかは、その人の人生に計り知れないほどの大きな影響力を持つものであるのとまったく同じように、どのような書物とめぐり逢い、そして、それらの書物からどのような影響を受けるかは、その人の人生に計り知れないほどの大きな影響力を持つものでもあるからである。

つまり、真に優れた「魂」こそは、第一のものではあるが、しかし、その真に優れた「魂」から生み出された真に優れた「書物」というものも、決してそれに劣らないくらい真に優れた「第二(或いは第三)のもの」となり得るものである。それゆえ、真に優れた「魂」との直接的な「対話(吟味)活動」こそは、第一の「哲学的問答法」であるとすれば、真に優れた「書物」(その中に宿る「魂」との間接的な「対話(吟味)活動」こそは、まさに第二(或いは第三)の「哲学的問答法」ともなり得るものではないかと思う。

それは、ソクラテスやプラトンのような真に優れた「魂」と親しく交わることによって、

相手の「生きた言葉」が自分の「魂の中」にも自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが数多く生み出されて来るようなものこそ、まさに第一の「哲学的問答法」であるとすれば、プラトンのような真に優れた「魂」によって生み出された様々な「書物」などと深く交わることによって、そこに書かれている言葉が自分の「魂の中」に様々な「考えや知識」として蒔かれ、植えつけられては、それらが次第に「成長・成熟」してきて、やがては自分自身の「心の中」からもいろいろな新しい「考えや知識」などが数多く生み出されるものこそは、まさに「第二」（或いは第三）の「哲学的問答法」ということにもなるということである。

そして、もう一つが、いわゆる自分を相手にしての「対話（吟味）活動」であり、それが、まさに「第三」（或いは第二）の「哲学的問答法」となり得る自問自答による「思考（思索）活動」である。そして、その自分を相手にしての「対話（吟味）活動」（つまり「自問自答」というのは、誰でもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）で実際に行なっているものではあるが、しかし、その場合、若しもその人がまだ未熟な「魂」であるならば（むろん、若い時は誰でも未熟な「魂」であるしかないが）、その人がいくら自分自身でものを深く考えようとしても、それには自ずと限界があるだろう。——つまり、自分だけの「思考（思索）活動」だけでは、どうしても物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることも、また、物事を深く考え深めることもできない。それゆえ、そのようなまだ未熟な若い「魂」にとっては、どうしてもそれを導いてくれる相手がぜひとも必要になって来るわけである。そして、その「導き手」となってくれるものこそは、まさに真に優れた「魂」であり、また、真に優れた「書物」である、ということである。

むろん、何も真に優れた「魂」や「書物」だけに限る必要などどこにもないではないか、という反論が当然生じて来るだろう。確かに、われわれ人間は、いろいろな人たちとあれこれ「対話（吟味）活動」（つまり「話」）をすることによって、実にいろいろなことを学ぶことになるとともに、例えば、新聞、雑誌、書物、その他の「活字」などを読んだり、また、テレビやラジオ或いはインターネットなどを見聞きすることによって、実に様々な「情報や知識」などを得ることにもなるわけである。そのように、われわれ人間というのは、誰でもいろいろな人たちと話をしたり、また、いろいろなものを見聞きしたりして、実に多くのことを学ぶことになるわけである。そして、そのような日々の積み重ねによってこそ、われわれ人間の「内的世界」というものは、次第に「拡大・拡充」されていくことになるのである。それゆえ、そのようなことも極めて大事なことであるというよりは、むしろわれわれ人間がまさに人間らしく「成長・成熟」するためには、どうしても必要不可欠な極めて大きな「基盤」となるものである。

しかし、そのような一般的な「対話（吟味）活動」や一般的な「書物」だけでは、どうしてもその人の「魂の眼」を「上の方へと十分に上昇させる」ためには、必要かつ十分とはなり得ないものである。なぜなら、そのようなものの多くが、われわれ人間の「魂の眼」を「現実界」の実に様々な「欲望や感情の方向」や様々な出来事の「現象的な興味」へと向けさせるものであるからである。それをプラトン風に言えば、絶えず変化する雑多な現象（事物）へと目を向けさせ、一方、恒常不変のあり方を保つ（イデア）を観て取る（「観照できる」）方向へと、なかなか導いてはくれないものだからである。それでは、何がそ

のような方向へと導いてくれるものかと問えば、それこそは、まさに真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などであるということになるのである。

例えば、その人の「思考（思索）能力」がまだ未熟な状態であれば、その人がいくら一生懸命に「自問自答」をしてものを考え深めても、物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることは、なかなかできにくいだろう。それゆえ、例えば、ソクラテスやプラトンのような真に優れた「魂」と親しく「対話（吟味）活動」などを行なうことによってこそ、その人自身の「思考（思索）活動」だけでは、とてもそこまでは深く入って行けないようなところまで、その真に優れた「魂」に導かれて、一緒にその「思考（思索）活動」を深めていくことになるのである。そして、そのような親密な「対話（吟味）活動」を何年も積み重ねていくことによってこそ、その人自身の「思考（思索）能力」も真に鍛えられ、真に育て上げられることにもなるわけだ。——それは、真に優れた「書物」との「深い交わり」の場合でも、全く同じことが言えるのであり、その「優れた書物」の内容をできるだけしっかりと理解しながら前に読み進んで行くことによって、その人自身の「思考（思索）能力」だけではとてもそこまでは深く入って行けないようなところまで、その「優れた書物」（その中に宿っている魂）に導かれて、その人自身の「思考（思索）活動」をより深めていくことになるわけである。そして、そのようにして「優れた書物」を読み進んでいくうちには、どうしてもよく理解できない部分や疑問に思うようなところがあちこちに出てくることになる。そうなると、そこで立ち止まって、何度もその部分を何とか理解しようと読み直すことになり、それでも思うように理解できなければ、その部分は飛ばして先に読み進んでいくことになるかと思う。そして、そのような箇所がいくつも出てきて、その人の「頭の中」にはよく理解できない部分や疑問に思うようなことなどが自然と数多く蓄えられるようになるわけである。そうなると、そのことがどうしても気になっているので、いろいろな折りに、そのことを思い出しては、「……あれは、一体、どういう意味なんだろうか？」、あるいは、「……あれは、一体、どういうことなんだろうか？」と、あれこれ自問自答を繰り返すことになるかと思う。そして、そのような「心的状態」になることこそは、最も大事なことであるとともに、真に優れた「書物」を深く読むという本来の「読書」というものがもたらす最大の長所でもあるわけである。

なぜなら、そのような「心的状態」こそは、現実的な「様々な欲望や快楽その他」などを得んがために行なわれる「思考（思索）活動」とはまったく違って、まさに「真知」を愛し求め、それを得んがために「自らものを考えている」という「純粹思考」（純粹思惟）を行なっている「心的状態」であり、そのようなことを何度も繰り返すことによってこそ、その人自身の「思考（思索）能力」が真に鍛えられ、育っていくものだからである。そして、そのようなことを何年も積み重ねることによってこそ、やがて、その人も最初は極めて未熟な「思考（思索）能力」でしかなかった状態から、次第に物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを、その人なりにとらえることができ得るようになっていくというのである。そして、そのような方向へと導いてくれるものこそは、まさに真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などであるということになるわけである。

もちろん、われわれ人間は、誰でも「自問自答」という「思考（思索）活動」を行なっているものである。しかし、一般的な「思考（思索）活動」（つまり「自問自答」）では、なかなか物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることはできにくい。それでは、一体、

どうすればよいのかと言えば、それには、どうしても自分自身の「思考（思索）能力」を真に「成長・成熟」させなければならず、そのためには、やはり真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などと深く交わって、いわゆる「上の方へと導かれる」ことを何年も積み重ねることによってこそ、初めて、その人自身の「思考（思索）能力」も真に鍛えられ、育っていくことになるわけである。そして、その真に鍛えられ、育てられた「思考（思索）能力」をもって、一方では、できるだけ「論理的（知性的）思考」を無限に積み重ねながらも、もう一方では、いわゆる「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っては、独りぼんやりと「物想い」（或いは「空想」）を楽しんでいる「心的状態」になっているような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、ある「難題」について、今まで無限に積み重ねてきた、いわゆる「論理的（知性的）思考」だけではどうしても越えられなかった「行き詰まり」状態を超えて、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、或る「真実・真理」を突然として「直知・直観」することになるとともに、われわれ人類が得てきた実に様々な「真実・真理」というものは、まさにそのようにしてとらえられたものが非常に多いかと思う。——それゆえ、真に優れた「魂」との対話、真に優れた「書物」との対話、そして、真に成熟した「自分自身」との対話、これら「三つのもの」が、いわば一体となつて、実際には物事の「真実・真理」などをとらえることになるとともに、それこそは、今日の物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」ということになるのだろう。（むろん、物事の「真実・真理」などを直接とらえるのは、言うまでもなく、自分自身との「対話」によってではあるが。）

五、車の両輪

例えば、「美のアイデア」というのは、ある日、ある時、（突如として）観て取られるというような表現があるが、それも今まで積み重ねてきた無限の「論理的（知性的）思考」というものをしっかりと踏まえながらも、それだけではどうしても越えられないものがあり、その越えられないものを越えるためにも、自問自答による「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、（突如として）観て取れるものであり、それゆえ、そこには何か「論理的（知性的）思考」方法を超えるような、ある種の「超論理的（超知性的）思考」方法が存在し、それこそは、まさに物事の「真実、真理、その他」などを直接的にとらえる、いわゆる「直知・直観」というものになるということである。

むろん、そこで得たものが、いつも本物の「真実・真理」であるかどうかは分からない。時にはただ単なる「空想」（或いは「妄想」）に過ぎないものもあるかも知れない。それゆえ、再び、そこで得たものを極めて厳密に「吟味（検討）」し直してみるという「論理的（知性的）思考」活動が、どうしても必要不可欠になって来るわけである。それゆえ、いわゆる「論理的（知性的）思考」活動と「没我的思考」活動とは、もうお互いに切っても切れない「車の両輪」のようなものであり、その両者は、お互いに交互に活動をしているものであり、一方の「論理的（知性的）思考」活動で行き詰まれば、それを「没我的思考」活動で打開し、それによって得たものは、再び、「論理的（知性的）思考」活動によ

って、厳密に「吟味（検討）」し直されるといふことの「連続」（つまり「繰り返し」）によってこそ、やがては「最終的な地点」へと向かっていくわけであるが、その「最終的なもの」（つまり物事の「真実・真理」）などを直接とらえるのは、どちらかと言えば、やはり「没我的思考」活動（つまり「沈想」状態）に深く溶け込んでいるような「心的状態」になっている、そのような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、それゆえ、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、何か人類的な「難題」などが一気に解決できるような決定的な「考えやヒント」などを得たり、あるいはその人の「思惟界」で或る物事の「真実、真理、その他」などを観て取るという、いわゆる「直知・直観」というものが生じることが非常に多いということである。

つまり、長い階段を一步一步上っていき、そして、最後のところで或る「真実・真理」を得るといふ「論理的（知性的）思考」方法だけでは、どうしても越えられない「行き詰まり状態」に陥ってしまうことが非常に多いわけである。そこで、どうしても越えられないその「行き詰まり状態」を打開し、突破していくものが、まさにもう一つの「思考（思索）方法」である自問自答による「没我的思考」であり、その「没我的思考」に深く溶け込んでいるような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、その人の「思惟界」で或る「真実、真理、その他」などを、まさに「直知・直観」することにもなるのである。

六、智を生めない者

例えば、ソクラテスは、いつも「行き詰まり状態」に深く陥って、身動きできないような「心的状態」だったのだろうか？ もちろん、そうではないだろう。なぜなら、ソクラテスは、例の「没我的思考」方法によって、誰よりも深く「沈想（瞑想）状態」を経験し、実践していた人だからである。それでは、ソクラテスは、なぜ、自ら積極的に様々な「知識」を生み出そうとはしなかったのだろうか？ その理由については、『テアイテトス』という著作のなかで、次のように明言している。「……すなわち僕は智を生めない者なのだ。そしてそれはすでに多くの人たちが僕に非難したことなのであるが、僕は他人には問いかけるが、自分は、何の知恵もないものだから、何についても何も自分の判断を示さないというのは、いかにも彼らの非難のとおりである。これにはしかし次のような子細がある。僕は取上げの役の方をしなければならぬように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちつとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もないしだいなんだ。ところが、僕と一緒にいる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、はじめこそ全然無知であると思える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによっても、また他人に思われるところによっても、驚くばかりの進歩をすることは間違いないのだ……」（『テアイテトス』34A～B）

例えば、晩年のソクラテスは、老若男女を問わず、もうありとあらゆる分野の人たちと人間の「諸問題」について積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことをいわば毎日の日課のようにしていたわけであるが、そのなかでも特に若い人たち（青年たち）と好んで「対

話（議論）」を行なうような傾向が強かったかと思う。そのような場合、つまり、若い人たち（青年たち）といろいろな問題で「対話（議論）」を行なうような時には、ソクラテス自身にとつて、そこで議論される「様々な問題」などは、すでにもう何度ともなくソクラテスの「頭の中」（或いは「心の中」）で徹底的に「吟味（検討）」されていたものばかりになるだろう。だとすれば、まだ「知的能力」の未熟な若い人たち（青年たち）とあれこれと「対話（議論）」を行なうことによつて、ソクラテス自身、彼らから何かびつくりするような新しい「知識や智慧」などが得られることは、極めて少なかっただろう。

それでは、ソクラテス自身は、一体、どこで自分自身の「思考（思索）」を深めていたのかと問えば、それこそ、まさに例の「没我的思考」方法（つまり自分自身との徹底した「哲学的問答法」）によつてこそ、その「思考（思索）活動」をどこまでも深めていたということである。つまり、晩年のソクラテスが、若い人たちと好んで哲学的な「対話（吟味）活動」を行なっていたのは、何もそこから何か新しい「知識や智慧」などが得られるからではなく、むしろ、若い人たちの「心の眼」を目覚めさせるためのものであったということである。つまり、人間としてまさに心身ともに成長し、でき上がっていく若い人たちの、その「内的世界」をほんとうに「育て上げる」ためには、あれこれの知識を直接、教えるのではなく、それでは、若い人たちは、ただ「正義とはこうである」という「知識」だけを受け取って、自らは、少しも「何も考えない」ことになつてしまふだろう。

それでは、若い人たちの「思考（思索）能力」は、少しも「成長・成熟」していない。それゆえ、むしろ一緒に様々な「人間の諸問題」についていろいろな角度から徹底的に考え深めていくという方法によつてこそ、その人の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げることができ得るとともに、その人自身、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になるようにと、ソクラテスは、いわゆる「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）を用いて、まさに「産婆術」を実践していたということになるということである。

それでは、なぜ、ソクラテスは、そのようなことをするようになったかと言えば、それは、もちろん、ソクラテス自身、もともと若い人たち（青年たち）とあれこれ「対話（議論）」をすることが好きであつたからだろうし、また、いわゆる「教育者的資質」をその内面に持ち合わせていたからということにもなるのだろう。しかし、それらだけでは恐らく、晩年のソクラテスが実際に行なっていたあの徹底した「対話（吟味）活動」へは、まっすぐに直結するものではない。それでは、それらに何がつけ加わつたからこそ、あのよくなソクラテスの徹底した「対話（吟味）活動」へとなつて行つたのだろうか？ それは、言うまでもなく、例の「デルポイの神託」の「謎解き」の結果ではあるが、それは、「ソクラテスより知恵のある者は誰もいない」という、いわゆる「デルポイの神託」の謎かけの真意は、一体、何なのか、それをぜひとも解明したいと思ひ、長いあいだ、ソクラテスは考えあぐねた末に、次のような「ある考え」がふと浮かんでくるわけである。

それは、自分よりも知恵のありそうな人をたずねては、ほら、この人の方が自分よりも知恵があるじゃないかと、神託に反駁することだつたわけである。そこで、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな分野の「知者」たちをたずね歩くことになるが、その場合、相手の人が間違ひなく自分よりも「知者」であるという確たる証拠が得たいわけであるから、当然のことながら、相手との「対話（吟味）活動」は、極めて徹底したものにならざ

るを得ないだろう。ここにこそ、ソクラテスのまさにあの徹底した「対話（吟味）活動」の第一歩が踏み出されたとともに、例の「デルポイの神託の真意」がはっきりとわかった時点からは、ソクラテスは、老若男女を問わず、もうありとあらゆる分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうように心がけ、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、「知者」だと思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手の「無知」（様々な「思い違い」など）をはっきりと自覚させるような活動こそ、まさに「デルポイの神託の真意」であるとともに、「神からの絶対的な命令」であると考えて、極めて意識的に行動（つまり「哲学の実践」）を行なうようになったということである。

それが、すなわち、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っては、一日じゅう、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにする最大の理由になるわけである。——つまり、「デルポイの神託の真意」がはっきりと分かった時点からは、むしろ、それ以前からもそういうことは行なっていただろうが、しかし、「デルポイの神託の真意」がはっきりと分かった時点からは、まさに「神からの絶対的な命令」という極めてはっきりとした使命感を持って、ソクラテスは、意識的に「真実・真理」の探究のためだけではなく、それに加えて、対話相手の「無知」（様々な「思い違い」など）をはっきりと自覚させるためにこそ、まさにその「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法）」というものをフルに活用したということである。それが、すなわち、アテナイ人の「心の眼」をいつも目覚めさせておくために、神によってこの国都ポリスに付着させられた「アブ」のような役割をしていた、ソクラテスということになるわけである。

七、結び

話が大きくそれてしまったが、ソクラテスには、次の二つの「思考（思索）方法」があったということである。その一つは、非常によく知られているいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうソクラテスの姿であり、そして、もう一つは、逆に、他人から完全に離れて（つまり他人を全く寄せつけずに）、孤独ひとり立ったまま「思考（思索）活動」に耽入するという例の「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）である。むしろ、この二つのものは、決して別々のものではなく、むしろ他人との「対話」と自分自身との「対話」、この二つのものが、まさに「車の両輪」のように切っても切れないほど極めて親密な関係で相乗作用をもたらしながら、ソクラテス自身の「思考（思索）活動」をより深め、促進させていたとともに、まさにソクラテス自身が実際に行なっていた物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」であったということになるわけだ。——そして、プラトンを始めとして、今日の私たちが実際に行なっているのが、他人との「対話」、書物との「対話」、そして、自分自身との「対話」、これら三つのものがその人の「頭の中」（或いは「心の中」）でいわば一体となって（つまりお互いに協力し合って）、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というものになっているのである。

*

*

ソクラテスの「物想い」

ソクラテスの「物思い」について

さて、ソクラテスには非常に有名な「物思い」（つまり「没我的思考」）というものがあるが、それは、いわゆる『饗宴』という著作のなかに出てくるものであり、その部分をもう少し引用しておきたいと思う。

それは、ソクラテスが北部バルカンの都市ポティダイアの包囲戦に出征した時の話である。「……話というのは、こうだ。あるとき、彼は思索にふけり、朝早くから同じところに立ちつづけて、なにかを考えていた。けれども考えがうまくすすまないで、途中で投げださずに探求しつづけて立っていたのだ。

ときは、すでに午ひるになって、これに気づく人々が出てきた。彼らはげんに思い、ソクラテスが朝早くからなにか思いをめぐらして立ちつづけているぞ、と人ごとに話しあっていた。——ところが、ついに夕方になってしまったこととて、食事のあと、イオニアの隊に属するある兵士らが、そのときは夏の陣だったので、藁わらぶとんを外にもち出し、涼しい外気のなかで寝ながら、はたしてこの人が一晩じゅう立ちつづけるかどうかを見張っていたものだ。しかし、晩がおとずれ、太陽が上がるまで、彼は立っていたのだ。それから、太陽にむかって祈りをささげ、去っていった。……」とある。『饗宴』219C～D)

さて、この有名な「逸話」（エピソード）が、もし本当のことだとすれば、当時三十七歳であったソクラテスは、ある時、朝早くからずつと立ちつづけ、そして、翌朝の太陽が昇るまでの約二十四時間（丸一日）、ずつと同じところに立ちつくして、何か「物思い」に耽ふけるっていたことになる。これは、ふつう誰がどう考えても確かに極めて長い時間にわたっての「物思い（沈想）」ということになるかと思う。しかも、ソクラテスの場合には、それほど長くなくても、何時間も、いわゆる「物思い（沈想）」に耽ふける入るといふようなことが度々たびたびあったということである。

それでは、なぜ、ソクラテスにはそのような長い「物思い（沈想）」というものがあつたのだろうか？ この問題について、もうすこし考えてみたいと思う。

例えば、誰でも、多かれ少なかれ、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような感じで、ふと或る「考えや想い」などが浮かんでくることはよくあることだと思う。しかも、ソクラテスのように、実にいろいろな分野の人たちと好んで「対話（吟味）活動」を行なっているような人であれば、彼の「頭の中」には、いわゆる「人間の諸問題」についての実に様々な「疑問や問題点」などがいつも内在していたことになるだろう。

それは、例えば、どういう分野の学者であっても、その人が真剣に取り組んでいる「研究」対象についての様々な「疑問や問題点」などが、いつもその人の「頭の中」に内在しているのと全く同じことである。そして、そのようにいつも様々な「疑問や問題点」が内在している状態の「頭の中」に、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、われわれは、一体、どうするだろうか？ むろん、それは、人によってそれぞれみな違ってくるだろうが、ふつう自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、それがたとえトイレの中でも、風呂の中でも、また、道を歩いている時でも、電車の中でも、あるいは夜中、床の中に入っている時でも、その他、それはもうどのような場所や時間であっても、もしその人にとって極めて魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、その

場所や時間のことよりも、その極めて魅力的な「考えや想い」などの方により心を奪われているような状態になるのではないかと思う。

例えば、何らかの学者や研究者の人が、長い間、真剣に取り組んでいながらも、どうしても解けずにいた「研究」対象の「難題」などがぱつと解けるような、自分でも思いがけないような「考えや想い」などがふと浮かんできた時とか、あるいは文学者や芸術家などが、自分でも思いがけないような魅力的な「作品の着想やヒント」などを得た時など、自分でも思いがけないような感じでふと浮かんできた或る「考えや想い」などが、その人にとつて極めて「魅力的なもの」であればあるほど、自分が今いる場所や時間のことなどよりも、その思いがけない「考えや想い」などを忘れないためにも、できるだけ早く何かに書き留めておきたいという「強い衝動」にかられ、自分の身のまわりに何か「筆記具」か何かないかと捜しまわり、できるだけ素早く書き留めておこうという「行為（行動）」をとることは、よくあることではないかと思う。

それゆえ、ソクラテスも、もし文章を書くような人であれば、恐らく、そのようにしたに違いない。しかし、ご存知のようにソクラテスという人は、一生涯、自分の「頭の中」だけでものを考えるようなタイプの人であり、確かに「書かれたもの」（書物）を読むようなことはあったであろうが、しかし、文章を書きながらものを考えるというようなことは、ほとんどしなかつた人である。それゆえ、ソクラテスにとつて、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時に、ふつうであれば、それを何かに書き留めておいて、あとでじっくり考えるところでもできただろう。しかし、ソクラテスの場合には、そういうことをほとんどしない代わりに、その場に立ち止まり、そして、彼の「頭の中」だけで自分でも思いがけないような感じでふと襲われたその魅力的な「考えや想い」などをもとにして、どんどん考えを深めていくということを行なっていたことになる。それが、まさにソクラテスの何時間も続く「物想い（沈想）」ということになるのだろう。

それでは、なぜ、その場に立ち止まって「ものを考える」のだろうか？ 家に帰ってからもよいではないか、という人もあるかも知れない。しかし、ある魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時こそ、まさにそのことを考えるのに「最適の時」なのである。つまり、そのことを考えるのに最も適した「頭の状態」（つまり「思考状態」）になっているということである。それゆえ、もし家に帰ってからという「時間の経過」を経たしまつと、せっかく魅力的な「考えや想い」などに襲われ、そのことを考えるのに最適の「頭の状態」（つまり「思考状態」）だったものとは、すっかり変わってしまうことが非常に多いわけである。しかも、ソクラテスのように「頭の中」だけでものを考えるというタイプの人であれば、その場でしっかりと考えておかなければ、あとでは忘れてしまう危険性も多分にあるわけである。それでは、忘れない程度に考えておき、あとは家に帰ってから徹底的に考えたらよいではないかという人もあるかも知れない。しかし、ソクラテスという人は、ひとたびものを考えはじめると、彼の「頭の中」だけでどんどん物事を考え深めていき、そして、ソクラテス自身、もうここでよいだろうと納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達するまでは、途中で（つまり中途半端な状態のまま）考えることをやめるといふことができなかつた、そういう非常に「精神の集中力」の強い人だったということである。だからこそ、なかなか思うように考えが進まないような時に

は、非常に長い「物思い（沈想）」になることも多かったわけである。

そして、ソクラテス自身、もうこれでよいだろうと納得のいくような何らかの結論（いわば最終地点）にまで達したならば、そこでもうすべてが終わるのではなく、それに加えて、彼の「頭の中」に何らかの形で「記憶保存」するというを行なっていたに違いない。それは、例えば、「将棋」や「囲碁」などを専門に行なっているプロの人たちであれば、自分が「対局」した「将棋」や「囲碁」は、最初から最後までよく覚えていて、「対局」が終わったあとで、もう一度、それを思い出しながら、その「対局」のどこがどうだったという反省ができるわけである。もちろん、だからと言って、何年も何十年にも渡った数多くの自分の「対局」のすべてを、一つ残らず覚えていていうのではない。もちろん、そうではない。ただ、かなりの量の「対局」をかなり正確に覚えていていられるのである。それと同じように、ソクラテスの場合にも、何かに書き留めておくということをほとんどしなかった人であれば、彼の「頭の中」では何らかの方法で記憶を保存するというを行なっていたに違いない。そうでなければ、大事なことも何でもほとんど忘れてしまうことになるからである。それを何とかくい止めるための何らかの「記憶力の訓練」（つまり「記憶術」）をしっかりと身につけていたと考える方が、遙かに自然で無理のない考え方になるのだろう。少なくとも今日のわれわれよりは、遙かに「記憶力のよかった人」であったことに間違いはないだろう。

つまり、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや思い」などにふと襲われた時に、ソクラテスは、その場で立ち止まり、そして、その思いがけないような「考えや思い」などをきっかけとして、ひとたび真剣に物事を考えはじめると、彼の「頭の中」だけでほとんど物事を考え深めていき、そして、もうここでよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達しない限りは、中途半端なところで考えることをやめるといえることができないう、そういう非常に強い「精神の集中力」を持つていたということである。だからこそ、なかなか自分の思うように考えが進まない時には、どうしても非常に長い「物思い（沈想）」になることも多かったのだろう。そして、そのような長い「物思い（沈想）」の結果、これでもよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達したならば、それでもうすべてが終わるのではなく、恐らく、もう一度、最初から最後まで「物思い（沈想）」をじっくりと思い出しながら、いわゆる「再確認」（再認識）をし、そして、ソクラテス自身、何らかの意味で必要かつ大事だと思われることは、彼の「心の中」のいわば「記憶保存室」の中に忘れないようにしっかりと蓄えておくことを行なっていたに違いない。そうでなければ、せっかく考えたことや大事なことも、どんどん際限なく忘れてしまうことになるからである。

それでは、なぜ、ソクラテスは、「立った」まま考えたのか、「坐って」考えてもよかったのではないかという素朴な疑問が生じるかも知れない。もちろん、今日のわれわれであれば、「立ってでも、坐ってでも、どちらでもよい」のだろうが、しかし、ソクラテスやプラトンなどの「考え方」のなかには、いわゆる「頭」の位置を少しでも上にすることは、すなわち、それだけ「天（或いは神）」により近づいた状態になるという考え方があって、それゆえ、「天（或いは神）」により近づいた状態でものを考える方がよりよいということになるのだろう。また、ソクラテスという人は、非常にからだの丈夫な人だった

ので、一日じゆう立っていても、今日のわれわれほどには疲れなかったのかも知れない。また、ソクラテスのようにじつと立ったままものを考えていたら、多くの人たちの目に付いて、がやがや騒がれて、ものを考えるにはかえって不向きではないかという疑問が生じるかも知れない。もちろん、そういう他人の目やがやとした騒ぎにならないように、できるだけ人目を避けた場所に身を移してから、本格的に考えはじめるということを行なっていたのだろう。しかし、ひとたび物事を真剣に考えはじめると、もうまわりのことや時間のことなどはそれほど気にならず、とにかく、これでよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論(いわば最終地点)」まで行かなければ、気がすまないという、そういう非常に強い「精神の集中力」を持った人であり、それゆえ、物事を真剣に考えはじめると、まさに「没我的状態」に深く陥ってしまい、まわりのことや時間のことよりも、物事をどんどん考え深めていくということに取り憑かれてしまうという、そういうタイプの人だったということである。

それに加えて、大事なことは、ソクラテスの「物想い(沈想)」というのは、いわゆる「ダイモンからの合図」とはまったく違うということである。というのも、例の「ダイモンからの合図」というのは、いわゆる「禁止の合図」であって、ソクラテスが何らかの「行動(言動)」をしようとする時に、「それはしてはいけない」という感じで、彼に聞こえて来るものであり、それゆえ、今、しようと思つていふことをやめて、何か別の「行動(言動)」を行なえば、それでよいことであり、何時間もずつと立ったまま「物想い(沈想)」に耽入するということは、かえって不自然なことになるからである。それゆえ、もしも例の「ダイモンからの合図」があるとすれば、それは、むしろ「物想い(沈想)」の状態に入っている時に、ソクラテス自身、まだこれという納得のいくような「結論(いわば最終地点)」にまで到達していないのに、もうこの辺でよいだろうと、中途半端なところで考えることをやめて、その場から離れようとした時にこそ、まさに例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)が聞こえてきて、それゆえ、その場から立ち去ることができず、ソクラテス自身、もうこれでよいだろうと納得がいくような「結論(いわば最終地点)」まで考え続けることになっただろう。それゆえ、ふと立ち止まって「物想い」に耽入するというのは、いわゆる「ダイモンからの合図」とはまったく違うものである。

つまり、ソクラテスの「頭の中」には、いわゆる「人間の諸問題」についての実に様々な「考えや疑問」などがいつも内在していて、そして、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような感じで、ふと或る「考えや想い」などに襲われた時にこそ、その場で立ち止まり(その場合、むしろ道からそれて人目を避けたり、また、ものを考えるのによい場所に身を移してから)、例の「物想い(沈想)」に耽入することになるのだろう。それゆえ、例の「物想い(沈想)」に耽入するのは、ソクラテス自身、意識的に「さあ、これからある問題について考えよう!」と思つて考えはじめる場合とは少し違って、あるいはそういう場合もあったかも知れないが、むしろ、ある時、ある場所で、ソクラテス自身にとつても思いがけないような感じである魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時にこそ、例の「物想い(沈想)」に深く耽入することが多かったのだろう。

それゆえ、ソクラテス自身、ある問題についていろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なつては、お互いに議論を深めていくような場合とは違って、例の「物想い(沈想)」というのは、まさにソクラテス自身の、いわゆる「自問自答」という

ことになるかと思う。また、人によっては、あの「物思い（沈想）」というのは、例えば、「神からの命令」を受けているとか、あるいは「神と対話」をしているというような考え方もあるそうであるが、なにも特別そのように考える必要はないだろうと思う。というのも、こういうことは、誰にでも、多かれ少なかれ、その内容や質の問題などはあるにしても、自分でも思いがけないような感じで、ふとある「考えや思い」などに襲われることはよくあることで、それを何か特別のように考える必要は特にないだろうと思う。

*

*

第三部

ソクラテスの「ダイヤモンドからの合図」

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第三部

③ソクラテスの「ダイモンからの合図」

- 一、 知性と理性
- 二、 母体のようなもの
- 三、 内なる神
- 四、 政治家に反対
- 五、 なぜ、合図はなかったのか
- 六、 最大の謎解き
- 七、 ダイモンからの合図の推移
- 八、 「量刑」の申し出の「謎」

* 参考文献

ソクラテスの「ダイモンからの合図」

ソクラテスの「ダイモンからの合図」

それは、プラトンの『ソクラテスの弁明』のなかで、ソクラテス自身は、例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)については、次のように説明をしている。

「……つまり、わたしから諸君はたびたびその話を聞かれたでしょうが、わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。それは、メレトスも訴状のなかに茶化して書いておいたものです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをわたしにさしとめるのでして、何かをなせとすすめることは、いかなるばあいにもないのです。」(31d)

それでは、そのソクラテス自身、自ら「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)と呼んでいたものは、一体、どこから聞こえてくる「声」(合図)だったのか？ そのことについて、できるだけ詳しく考えてみたいと思う。

例えば、われわれ人間というのは、誰でも自分がいま行なっている「言動」について、いつもその自分の「言動」を同時にチェックしている「もう一人の自分」がいることになる。例えば、他人とあれこれ話をしている時に、つい相手を傷つけるような言葉を言ってしまった、「あつ、今の言葉は言うべきではなかったなあ」と「反省」(チェック)が入ったり、また、相手と話をしているうちに、お互いの感情がもつれてきて、相手に怒りをぶつけたい衝動にかられた時にも、「いや、ここで怒りをぶつけて、喧嘩をするわけにもいかないだろう」といった感じで、自分の感情を抑えるような「チェック」(抑制)が入ったりするものである。また、例えば、「今日は、学校(或いは会社)に行きたくないなあ、休みたいなあ」と思っている自分と、「いや、やっぱり無理をしても行かなければしょうがないだろう。だいいちそんなふうに自分を甘やかしてどうするんだ」といった感じで、「もう一人の自分」からのチェックが入ることも多いかと思う。

そのように、われわれ人間というのは、誰でも自分がいま行なっている「言動」について、いつもその自分の「言動」を同時にチェックしている「もう一人の自分」がいることになる。そして、自分がいま行なっている「言動」について、もう一人の自分から「何か間違った行動をしようとする時」にはチェックが入って、「それはしてはいけない」という禁止の声となって来るものである。例えば、ある人が、デパートなどに行って、そこで何か欲しいものを見つけた時に、それを正式に金を出して買うのではなく、ふと「万引きをして、それを手に入れよう」と思ったとする。そうすると、その人は、何気なくまわりを見まわして、誰も自分を見ていないかどうかを確かめながら、その商品を自分の懐へと素早く隠そうとするかと思う。さて、ここで最も大事なことは、その人の「頭の中」でふと「万引きをしよう」と思ってから、それを自分の懐に素早く隠して「実際に万引き」をしようとするまでの間、その人の「心の中」では、例えば、「うまくいくだろうか、もし、万引きをしているところを誰か見つかったり、あるいは警察ざたなどになったらどうしよう、やっぱりやめた方がいいかな」、その他、そういう様々な思いがあれこれ浮かんで来るかと思う。そして、その人がまさにその商品に手を出して、それを自分の懐に素早く隠そうとする時に、「いや、やっぱりやめとこう。もともと万引きなどしちゃいけないんだ」、その他、そういう思いで、万引きを思い留まることもあるだろう。もちろん、実際

に万引きをしてしまう場合もあるだろうが、そのように、一方では、「万引き」をしようとする自分と、もう一方では、「いや、そんなことはしてはいけないんだ」という、もう一人の自分が必ずいることになる。そして、「そんなことをしてはいけないんだ」という、もう一人の自分とは、一体、何なのかと問えば、それこそは、まさにその人の「理知的部分」なのである。——つまり、自分の「言動」に絶えずチェックを入れている「もう一人の自分」とは、すなわち、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」から成る）ということである。

一、知性と理性

それでは、ここで、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」から成る）ということについて、できるだけ詳しく説明をしておきたいと思う。

例えば、一般に、いわゆる「知性」や「理性」という言葉は、その時代やそれを使う「人たち」（特に「哲学者」たち）によって、実に様々な「意味合い」で使われて来たものであるが、ここでは、次のような「意味合い」で使われているということをはっきりと定義をして、様々な「誤解」のないようにしておきたいと思う。

まず、「知性」という言葉であるが、この「言葉」は、いわゆる「知的な働き」のすべてを網羅するものであり、それゆえ、われわれ人間の誰もが行なっている「ものを考えたり、理解したり、判断したり、想像したり、予測したり、その他」の「知的な働き」すべては、まさに「知性」（或いは「知性的部分」）の働きであるということである。しかも、「知性」（或いは「知性的部分」）というのは、「善いこと」だけではなく、どんなに「悪いこと」（例えば「極悪非道」なこと）を考える時にも、必ず、「知性」（或いは「知性的部分」）を使って考える（この時、「理性」を使って考えるという使用法はない）ことになる。つまり、「知性」（或いは「知性的部分」）というのは、物事の「真偽、善悪、美醜、価値、聖俗、その他」などとらわれず、ありとあらゆる「考え、意見、判断、想像、予測、その他」などを行なっている、まさに「知的な働き」すべてを網羅するものである。

一方、われわれ人間というのは、一般的に、いわゆる「偽」よりは、「真」に価値をおき、「悪」よりは、「善」に価値をおき、「醜」よりは、「美」に価値をおき、そして、「俗」よりは、「聖」に価値をおくというような、「傾向」（特徴）がはっきりとあるかと思う。それでは、そのような「思考や判断」は、一体、何が行なっているのかと問えば、それはもちろん、「知性」（或いは「知性的部分」）も当然行なっているが、それとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのは、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」から成る）のなかでも、いわゆる「理性」（或いは「理性的部分」）であるというのが、ここでの「理性」（或いは「理性的部分」）という言葉の「使い方」であり、また、「理性」（或いは「理性的部分」）という言葉の「意味合い」になるということである。

例えば、「どんなうそをついても利益を上げたい」と思うのは、「欲」と結びついた「知性」（或いは「知性的部分」）の働きであり、一方、「利益のためにそんなうそをつくのはよくない」と言うのは、むしろ「理性」（或いは「理性的部分」）のほうである。また、「目的を達成するためにどんなあくどい手段をも辞さない」と考えるのは、「欲望

や野心」と結びついた「知性」（或いは「知性的部分」）のほうであり、一方、「目的のため」にそんなあくどい手段を使うのはよくない」と言うのは、むしろ「理性」（或いは「理性的部分」）のほうである。また、「どんな服装や髪型にしよう」と個人の自由である」と考えるのが、いわゆる「知性」（或いは「知性的部分」）であり、一方、「その場にふさわしい服装や髪型にしたほうがよい」と言うのは、むしろ「理性」（或いは「理性的部分」）のほうである。また、「人に迷惑をかけようが、人がどうなるかが、そんなことは知ったことではない。ましてや人のため、社会のため、あるいは様々な礼儀やマナーなどを心得る、そんなことはどうだっていい」と考えるのは、まさにその人の「エゴ」と結びついた「知性」（或いは「知性的部分」）のほうであり、一方、「人間としてそれにふさわしい行為（言動）をしたほうがよい」と言うのは、むしろ「理性」（或いは「理性的部分」）のほうになるということである。

そのように「知性」（或いは「知性的部分」）というのは、いわゆる「知的な働き」すべてを網羅するものであるのに対して、一方、一般に、「偽」よりは、「真」に価値をおき、「悪」よりは、「善」に価値をおき、「醜」よりは、「美」に価値をおき、そして、「俗」よりは、「聖」に価値をおくという、そういう「思考や判断」をより厳密に行なっているのは、むしろ「理性」（或いは「理性的部分」）であるということである。つまり、「知性」（或いは「知性的部分」）からは、ありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などが出てくるが、その出てきたありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などは、「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのが、まさに「理性」（或いは「理性的部分」）であるという「考え方」になるということである。

つまり、われわれ人間の「理知的部分」というのは、いわゆる「知性＋理性＋母体のようなもの」からなり立っているものであるが、そのなかの「知性」（或いは「知的部分」）というのは、われわれ人間の、いわゆる「知的な働き」すべてを網羅するものであり、それゆえ、その「知性」（或いは「知性的部分」）からは、ありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などが出てくるわけである。一方、その出てきたありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などの「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのが、まさに「理性」（或いは「理性的部分」）であるということである。もちろん、「知性」（或いは「知性的部分」）でも、当然のことながら、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を行なっているが、それをより厳密に行なっているのが、まさに「理性」（或いは「理性的部分」）であるということである。それでは、もう一つの「母体のようなもの」というのは、いったいどういうものになるのかと問われれば、それは、次のようなものになるということである。

二、母体のようなもの

まず最初に、われわれ人間の「理知的部分」というのは、本来であれば、いわゆる「知性＋理性」からなり立つ、という説明だけで十分なはずであるが、それに「母体のようなもの」というものを敢えてつけ加えなければならなかったのは、なぜなのか？

それは、次のような幾つかの「理由」からどうしてもつけ加えなければならぬからである。まず、われわれ人間の「知性や理性」というのは、生まれた時（つまり「赤ちゃん」

の時)は、まだこれという「確たるもの」ではなく、未だ「知性や理性」とは呼べないような状態のものである。つまり、まず最初は、知性とも理性とも呼べないようなすべてが渾然一体となっている状態であるが、やがて「知性や理性」などが生じて来る(つまり「知的部分」へと成長していくということは、すなわち、やがて「知性や理性」などが生じて来る「大元」(つまり母体になるようなもの)がなければならぬ。その「大元」(つまり母体になるようなもの)こそは、まさに「母体のようなもの」であり、その「母体のようなもの」から、やがて「知性」(或いは「知性的部分」と「理性」(或いは「理性的部分」)とが自然発生的に生じて、成長していくことになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、いわゆる「母体のようなもの」をうちに宿してこの世に生まれて来る。そして、その「母体のようなもの」というのは、未だ「知性や理性とも呼べないような渾然一体となっている状態」ではあるが、その母体の内には、いわば「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」というものを宿していることになる。もしそうでなければ、われわれ人間というのは、そもそも「善」という意識を持つことすらできないだろう。——つまり、この地球上に何十億といえる全人類のすべての人たちが、たった一人の例外もなく、文字通り、一人一人すべての人たちが、いわゆる「善」という意識を持ち合わせているとすれば、それは、決して「後天的なもの」(つまり「生まれたあと身につけるようなもの」)では決してなく、それは、まさに「先天的なもの」、つまり、生まれながらに「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)をうちに宿して、この世に生まれて来るという、何よりも「絶対的証拠」となり得るものである。

やがて、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)から、自分自身でも自覚できる、いわゆる「知性」(或いは「知性的部分」と「理性」(或いは「理性的部分」)とが自然発生的に生じて、いわゆる「知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)を形成するようになるが、その思惟主体である「知性+理性」に根底から働きかけ作用している「主体」(「源泉」)こそは、まさに「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)であるとともに、それは、逆に、まったく自覚できないものである。

また、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、いわゆる「知性(理性)の光」の「源(源泉)」でもあり、その「知性(理性)の光」がわれわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)で明るく燃^もっているからこそ、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)には、「思惟界」が存在できるということにもなるわけである。

さて、われわれ人間の「知的部分」というのは、いわゆる「知性+理性+母体のようなもの」から成り立っていることになる。そして、実に様々なことを「思考(思索)」する「知的活動」を行なっている主体である「知性」(或いは「知性的部分」というのは、いわゆる「善悪」どちらにも手を貸すことができ得るものである。また、それとほとんど同時進行的に、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっている「理性」(或いは「理性的部分」というのも、時には悪いとは知りつつも、様々な「欲望や感情」などに負けてしまう部分でもあるわけだ。ところが、いわゆる「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」は断じて妥協できない。なぜなら、「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)を内に宿している「母体のようなもの」というのは、いわゆる「善」という意識が生まれ出づるまさに「源泉」そのものだからである。それゆえ、「悪」とはどこまでいっても妥協できないと

ともに、「善」だけを望んで、決して「悪」を欲しないものである。——そして、その「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)こそは、まさにわれわれ人間の「良心」そのものの「源泉」そのものでもあるということである。そして、われわれ人間の「良心」というものが、何故に自分の思い通りには少しもならず、その「良心の呵責」などに深く悩まされることになるのかと敢えて問えば、それこそは、われわれ人間の「良心」というものは、まさに先天的な「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)の働きに他ならないという、そういう理由によるのである。

そして、「ああでもないこうでもない、あれをしちゃいけない、これをしてよいのかどうか」などの、あれこれの「思惟主体」(知性+理性)の働きは、自分でもはっきりと自覚できるものである。しかし、一方、その人の「思惟主体」(知性+理性)に根底から働きかけ、かっつき動かしているものこそは、まさに「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)であり、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、逆に、自分ではまったく自覚できないものである。なぜなら、それは、われわれ人間の心の最も奥深い「無意識の世界」に内在するものであり、それゆえ、自分自身では、まったく自覚できないものだからである。その自分でもまったく自覚できない「無意識の世界」に内在している「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からこそ、ソクラテスの場合は、「何々をしてはいけない」という禁止の声が聞こえてきたのではないだろうか。つまり、ソクラテスは、自分自身でもまったく自覚できないような、ソクラテス自身の心の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からの声を聞いていたということである。

三、内なる神

もし、ソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からの声ではなく、いわゆる外からの「神の合図」であるとすれば、いつも必ず「何々をしてはいけない」という禁止の声だけではなく、時には「何々をせよ」という命令的なものがあってもよいわけである。なぜなら、外からの「神」であれば、「神」は、人を導くために、あれこれ「命令や指示」を出すことは、よくあることだからである。例えば、直接、あるいは夢のなかに「神(或いは神の使い《天使》など)」が現われて、「何々をせよ」とか、「どこどこへ行きなさい」といった感じで、その人を或る方向に導くために、何らかの「命令や指示」を出すことの方が遙かに多いかと思う。それは、実際にあれこれ例を挙げるまでもなく、古今東西を問わず、実に数多くの人たちが直接、あるいは夢のなかに「神(或いは神の使い《天使》など)」が現われて、「何々をせよ」とか、「どこどこへ行きなさい」といった感じで、何らかの「命令や指示」を受けたという「体験(経験)」を語っている人は、意外と数多くいるものである。

つまり、ソクラテスの「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものが、いつも「何々をしてはいけない」という禁止の声だけであり、「何々をせよ」という命令や指示の声では決してなかったということこそは、まさに外からの「神の声」ではなく、ソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からの声であるという、何よりの証拠となるものである。なぜなら、

そのような特徴、つまり、「何々をせよ！」というあれこれの「命令や指示」ではなく、むしろ「何々をしてはいけない」という「善悪」の判断（識別）を行なっているのは、まさにわれわれ人間の「理的的部分」（つまり「知性＋理性＋母体のようなもの」）の最大特徴であるとともに、その「知性＋理性」に根底から働きかけ、作用しているものこそは、まさに「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）に他ならないからである。それゆえ、ソクラテスが「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）と呼んでいたものは、間違いなく、ソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの声であり、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）というのは、自分でもまったく自覚できない、いわば心の最も奥深い「無意識の世界」に内在しているものである。すなわち、ソクラテスが「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）と呼んでいたものは、ソクラテス自身にもまったく自覚できない、ソクラテス自身の心の最も奥深いところに内在していたソクラテス自身の「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からであり、それを別の言葉で敢えて表現すれば、それは、まさに「内なる神」からの声だったということである。

四、政治家に反対

ところで、ソクラテスは、「……それにしても、たぶん、おかしなことだと思われるかもしれませんが。わたしが、私交のかたちでは、いまお話ししたようなことを勧告してまわり、よいいなおせっかいをしていながら、公けには、大衆の前にあらわれて諸君のなすべきことを国家社会に勧告することをあえてしないというのは。しかしこれには、わけがあるのです」ということから、例の「ダイモンからの合図」というものを口に出して、次のように説明するわけである。つまり、「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。（中略）、これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをわたしにさしとめるのでして、何かをなせとすすめることは、いかなるばあいにもないのです。」

さて、ソクラテスの「ダイモンからの合図」というものが、ソクラテス自身の最も奥深いところと内在していたソクラテス自身の「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からであり、それを敢えて言えば、まさに「内なる神」からの声だとすれば、ソクラテスは、自分自身でもまったく自覚できない、いわば心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が、「政治家」になることを禁止していたことになるわけだ。それは、なぜかと言えば、それは、ソクラテス自身、無意識のうちに、もし自分が「政治家」になれば、様々な政治的（社会的）不正に対して、真っ向正直にどこまでも断固反対し続けるその結果として、とても身を全うすることなどできないだろうと、無意識のうちに察知していたからであろう。それは、ソクラテス自身の言葉では、次のように言っている。「……そしてそれ（ダイモンからの合図）が反対するというのは、じゅうぶん肯けることのように、わたしには思えるのです。なぜなら、いいですか、アテナイ人諸君、もしわたしが以前から国政上のごたごたに携わることをくわだてていたとしたら、わたしはとつくに身を亡ぼして、あなた方のためにも、

わたし自身のためにも、何ら益することがなかったでしょう。そしてどうか、わたしがほんとうのことを言うのに腹を立てないでください。というのは、諸君なり、他の大多数の人たちなりに、正直一途の反対をして、多くの不正や違法が国家社会のうちにおこなわれるのをどこまでも妨害しようとしたら、人間だれも身を全うする者はないでしょう。むしろ、ほんとうに正義のために戦おうとする者は、そしてすこしのあいだ、身を全うしているようにするならば、私人としてあることが必要なものでして、公人として行動すべきではないのです」とある。(31d~e)

*

*

つまり、ソクラテスは、本人自身でもそれとは気づかないままに、その心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)では、上述のような「思い(考え)」を潜在的(或いは本質的)に抱いていたからこそ、それが、まさに「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)となつて表面に表れ、ソクラテスが「政治家」になることを禁止していたことになるのである。ただ、素朴な疑問として、自分の内部から聞こえて来るものを、自分の外からの「神の合図」と間違えるということが、果たしてあり得ることだろうかという新たな問題が生じて来るかと思う。その「新たな問題」については、次のような説明で納得がいくのではないかと思う。

まず、「ダイモン」という言葉の定義からはじめたいと思う。例えば、当時、ダイモンというのは、「神々」と「人間」との間にあつて、「神々」の命令や指示を「人間」に伝える一方、「人間」の祈願などを「神々」に伝える役割りをする存在(仲介者)として考えられていた。——つまり、「神々」が直接、或る人に「ああしろ、こうしろ」といった命令や指示を出すのではなく、むしろ「神々」から何らかの「命令や指示」を受けた「ダイモン」が、その人のところに行つて、その「神々」からの「命令や指示」を「何らかの合図」で伝える役割りをする存在として考えられていたわけである。

それでは、なぜ、どこからともなく聞こえて来る、例の「何々をしてはいけない」という禁止の合図を、ソクラテスは、どうして「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」と呼ぶようになったのだろうか? それは、例の「何々をしてはいけない」という禁止の合図に素直に従つていけば、必ず「善い」結果をもたらしていたからだろう。——つまり、例の「何々をしてはいけない」という禁止の合図に素直に従つていけば、必ず「善い」結果をもたらすということは、一体、どういうことを意味するのかと考えた時に、それは、「神」がいつも自分のことを見守つていてくれて、そして、自分が何かよくない方向に向かおうとしている時には、いつも「例の合図」で「さしとめて」くれて、自分をしっかりと見守つてくれているのだというように、ソクラテスは、例の「禁止の合図」をどのように解釈するわけである。だからこそ、ソクラテスは、例の「何々をしてはいけない」という「禁止の合図」は、すなわち、「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)に違いないという確信を持つようになるわけである。なぜなら、いつも自分に「善いこと」をもたらして来れるのは、「神」以外にないと、ソクラテスは、そう考えていたからである。そして、ソクラテスが「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)と固く信じていたものは、実は、ソクラテス自身もまったく自覚できない、心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)(それを敢えて言えば、まさに「内なる神」)からの声だったという結論になるのである。

五、なぜ、合図はなかったのか

それでは、次に、例の「裁判」の時に、いわゆる「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものがまったくなかったということは、一体、どういうことを意味するのだろうか？ この問題についても、少し考えてみたいと思うが、その前に、やはりソクラテス自身の言葉を聞いてみたいと思う。「……(真の裁判官諸君)、わたしに妙なことが起こったのです。というのは、わたしにいつも起こる例の神のお告げというものは、これまでの全生涯を通じていつもたいへん数しげくあらわれて、ごく些細な(些細な)ことについても、わたしのおこなおうとしていることが当を得ていなければいには、反対したもののなのです。ところでこのたび、わたしの身に起こったことは、諸君も親しく見て知っておられるとおりでして、これこそ災厄の最大なるものと人が考えるかもしれないことであり、一般にはそう認められていることです。ところが、そのわたしに対して、朝、家を出てくるときにも、神の例の合図は、反対しなかったのです。また、ここにやって来て、この法廷に入ろうとしたときにも、反対しなかったし、弁論の途中でも、わたしが何かを言おうとしているようなばあいにも、反対しなかったのです。

ところが他のばあいには、話をしていると、それこそほうぼうで、わたしの話を、それは途中からさしとめたものなのです。ところがこのたびは、いまの事件に関するかぎり、行動においても、言論においても、わたしは反対を受けませんでしたのです」とある。

*

*

さて、本文のなかに、「……(真の裁判官諸君)、わたしに妙なことが起こったのです。というのは、わたしにいつも起こる例の神のお告げというものは、これまでの全生涯を通じていつもたいへん数しげくあらわれて、ごく些細な(些細な)ことについても、わたしのおこなおうとしていることが当を得ていなければいには、反対したもののなのです」という言葉があるので、このことから考えてみたいと思う。

例えば、一般的に言って、いわゆる外からの「神の合図」というのは、多くの場合、その人が「人生の岐路」に立ったような時にこそ、「神」は、その人を正しい方向に導くために、何らかの「合図」(命令や指示)を出すものであり、一方、ソクラテスが言うように、「ごく些細な(些細な)ことにも」いちいち合図があったということは、それがソクラテス自身の「内部」(母体のようなもの)からの声だからこそ、頻繁に「チェック」(禁止の合図)が入ったということになるわけである。逆に言えば、もし外からの「神の合図」であれば、ごく「些細な(些細な)こと」にまで、「いちいち「チェック」(禁止の合図)を出すようなことはしなかっただろうと思う。また、ソクラテスの「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものの「最大特徴」は、ソクラテス自身の言葉では、「……わたしの行なおうとしていることが当を得ていなければいには、反対したもののなのです」とあるが、その「……いま、行なおうとしていることが当を得ているかいないか」という厳密な「認識や判断」などを行なっているのは、ほかでもない、それは、われわれ人間の「理的的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)であるとともに、その「理的的部分」の「思惟主体」(知性+理性)に根底から働きかけ、かつつき動かしているものこそは、まさにソクラテス自身の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」(内

に「善のDNA」を宿す）であったということであり、そこからの「声」（つまり「禁止の声」）をまさに聞いていたということである。

次に、ソクラテスは、つぎのように話（言葉）を続ける。「……ところでこのたび、わたしの身に起こったことは、諸君も親しく見て知っておられるとおりでして、これこそ災厄の最大なるものと人が考えるかもしれないことであり、一般にはそう認められていることです。ところが、そのわたしに対して、朝、家を出てくるときにも、神の例の合図は、反対しなかったのです。また、ここにやって来て、この法廷に入ろうとしたときにも、反対しなかったし、弁論の途中でも、わたしが何かを言おうとしているどのようなばあいにも、反対しなかったのです。……」とある。(40c)

これは、ソクラテスにとって実に驚くべきかつ信じられないような、「一大内的事件」だったに違いない。それは、「……朝、家を出てくるときにも、神の例の合図は、反対しなかったのです。また、ここにやって来て、この法廷に入ろうとしたときにも、反対しなかったし、弁論の途中でも、わたしが何かを言おうとしているどのようなばあいにも、反対しなかったのです」という、まさにその「ものの言い方」に極めて如実にあらわれているものである。そして、もしソクラテスの「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」というものが、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）からの声だとすれば、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、一体、どうして自分の身を滅ぼすことになるかも知れない、この「人生最大の危機」に臨んで、「まったく何の合図」もしなかったのだらうか？ これは、確かに様々な「ソクラテス問題」の中でも、最も「大きな謎」の一つになるかと思う。

そして、このソクラテスに関する最も「大きな謎」の一つを、われわれは、今日、どのように解釈したらよいのだらうか？ というのも、この「大きな謎」に対しては、二千数百年来、未だこれという「最究極の答え」（つまり「一なる答え」）というものは、未だ得られないままであるからである。それでは、そのソクラテスに関する最も「大きな謎」の一つに対して、じっくりと腰を据えて、その「謎解き」を試みたいと思う。

六、最大の謎解き

例えば、ソクラテスが、法廷において、「事実や真実」だけを語り続ける限りは、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、それに対して、「チェック」（禁止の合図）を出すことはでき得ない。なぜなら、ソクラテスが、「うそやでたらめ」のことを話そうとすれば、それに対して、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、法廷で「うそやでたらめ」なことを言うことは、「決してよいことではない」ということから、ソクラテスに対して、「チェック」（禁止の合図）を出すことができ得るが、しかし、ソクラテスが、法廷で「事実や真実」を語り続ける限りは、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、それに対して、事実や真実など語るな、事実や真実などをこのまま語り続けられ、自分の身を滅ぼすことになるぞといった「チェック」（禁止の合図）を出すことはでき得ない。なぜなら、わが身可愛さから、「うそやでたらめ」なことを言うたりすることは、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、断じてそれを認めることができないからである。というのも、善のDNAを宿す「母体のようなもの」というのは、

何よりも「真善美」を愛し求めてやまぬという最大特性を持つものであり、わが身可愛さから、「うそやでたらめ」なことを言ったり、行なったりすることは、これを容認することとができないからである。それゆえ、ソクラテスが、法廷で「事実や真実」を語り続ける限り、ソクラテスの「内部」（母体のようなもの）は、ソクラテスが「事実や真実」を語ろうとする時に、この法廷で、事実や真実などあまり語るな、それは命を落とすことになるぞといった「チェック」（禁止の合図）を出して、「事実や真実」を語ることを止めさせることができないのである。なぜなら、法廷で、「事実や真実」を語ることは、間違いなく、「正しい」ことであり、それをわが身可愛さから、「うそやでたらめ」なことを言ったりすることは、決して「正しい」ことではないからである。それゆえ、ソクラテスが、法廷で「事実や真実」を語り続ける限りは、ソクラテスの「内部」（母体のようなもの）は、ソクラテスが「事実や真実」を語ることを止めさせる、「チェック」（禁止の合図）を出すことができないのである。それが、すなわち、ソクラテスが法廷において、ただの一度も、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものを受けなかったという「最大の理由」になるのである。

* * *

つまり、ソクラテスをして法廷で「事実や真実」を語るようにと、その「思惟主体」（知性＋理性）に根底から働きかけ、かつつき動かしていたものこそは、ソクラテスの心の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）であり、一方、ソクラテスが「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）と呼んでいたものも、ソクラテスの心の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの「声」（禁止の合図）だったわけである。それゆえ、この二つは、まったく同じソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）によって根底から働きを受け、かつつき動かされていたということになるわけである。そして、まさにその通りであれば、ソクラテスは、その「裁判」に臨んで、まさに何よりも事実を語ることに最重点をおき、わが身可愛さから、つまり、少しでも刑が軽くなるようにと、いろいろと「うそやでたらめ」なことを言ったりすることは、すべて避けたということになるかと思う。だとすれば、プラトンの『弁明』のなかで語られている内容は、プラトン自身の意図的な「うそやでたらめ」（或いは記憶違いの記述等）でない限りは、ソクラテス自身の「心の底からのまったく偽りのない言葉」ということになるのである。そして、そのような「心の最も奥深いところにあった様々な『思い』を語ること」に対して、例の「ダイモンからの合図」による「チェック」（禁止の合図）が全くなかったということは、ソクラテス自身にとって、それらはすべて「当を得た」おこないだったということになるわけである。

すなわち、ソクラテス自身の「内部」（母体のようなもの）は、ソクラテスが、この「裁判」で、ソクラテス自身の心の最も奥深くにあった「思い」（その中心思想）をすべて素直に「吐露」（公言）することに対して、まったく反対しなかったということである。それは、一体、どういうことを意味するのだろうか？ その「答え」は、次のようになるかと思う。それは、例えば、「……ソクラテスというやつがいるけれども、これは空中のことを思索したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な知恵をもっているやつなのだ」と、長年にわたって誤解されていたり、また、「……ソ

クラテスは犯罪者である。青年に対して有害な影響を与え、国家の認める神々を認めず、別の新しいダイモンのたぐいを祭っている」ということで訴えられている今こそ、自分のほんとうの姿というものはつきりと知ってもらうためにも、つまり、そもそも「ソクラテス」という人間は、一体、どういう人間であり、また、一体、何をしている人間なのか」と、この「裁判」で、多くのアテナイ人たちから真に問われている今こそ、自分の心の最も奥深くにある根源的な「思い」（その中心思想）をまさに語るべき時なのだ、ソクラテス自身は、それとははつきりと「自覚」（意識）することはできなかったかも知れないが、ソクラテス自身の心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）は、そのように作用し、働いたということである。だからこそ、「……朝、家を出てくるときにも、神の例の合図は、反対しなかったのです。また、ここにやって来て、この法廷に入ろうとしたときにも、反対しなかったし、弁論の途中でも、わたしが何かを言おうとしているどのようなばあいにも、反対しなかったのです。……」ということになるのである（『弁明』40b）

* * *

そして、この「裁判」に参加していた数多くのアテナイ人たちは、恐らく、初めて、なぜ、ソクラテスは、毎日、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他で、一日じゅう、いろいろな人たちと「人間の諸問題」について積極的に「対話（吟味）活動」を行っていたのかという、その一連の「理由」（真意）をソクラテス自身の「口」（肉声）からはつきりと知ることになったわけである。もちろん、そんなことを知ったからといって、多くのアテナイ人たちにとっては、まったく何の意味もなかっただろうが、しかし、後世の人たちにとっては、プラトンの『ソクラテスの弁明』とあつた根源的な「思い」（中心思想）というものを、はつきりと知ることができるとともに、そもそも「ソクラテスをしてソクラテスたらしめていたものは、一体、何だったのか？」という「最究極の問い」に対しても、われわれは、次のように答えることができるわけである。すなわち、ソクラテスの心の最も奥深いところの「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）こそは、まさにソクラテスをしてソクラテスたらしめていた最も根源的な「源泉」であり、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）こそは、ソクラテスの「思惟主体」（知性＋理性）に根底から働きかけ、かつつき動かしていたものであり、また、ソクラテスに例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものを送っていた主体でもあるわけである。なぜなら、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）こそは、まさにその人の心の「最も奥深いところに内在している『内なる神』」とも呼べるものだからである。すなわち、ソクラテスは、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）に、全幅の信頼を寄せて、それにどっぷりと身をまかせていたことである。そして、ソクラテスをして何よりも「知を愛し求めてやまぬ」（つまり何よりも「真善美」を愛し求めてやまぬ）ように根底からつき動かしていたものこそは、まさにソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）であつたということであるとともに、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が、ソクラテス自身の内部で（太陽のごとく）生き生きと躍動していたからこそ、ソクラ

テスは死ぬまで人間としての「真実・真理」を説いて、休みなく活動することができ得たということでもあるわけである。

*

一方、ソクラテス自身は、例の「ダイモンからの合図」が全くなかったことに対しては、次のように説明をしている。「……ところがこのたびは、いまの事件に関するかぎり、行動においても、言論においても、わたしは反対を受けませんでしたのです。それなら、何が原因なのでしょう。わたしの考えていることを、あなた方にお話ししよう。つまり、このたびのできごととは、どうも、わたしにとつては善いことだったらしいのです。そして、もしわれわれが死ぬことを災悪だと思っているのなら、そういうわれわれすべての考えは、どうしても正しくはないのです。なによりも、わたしの身に起こったことが、その大きな証拠です。なぜなら、例の神の合図がわたしに反対しなかったということは、わたしのこれからしようとしていたことが、なにかわたしのために善いものではなかったなら、どんなにしても起こりえないことだったのですから。……」とある。(40b～c)

これは、もう実に驚くべきかつ信じられないほどの「絶対的な信頼」である。このような「絶対的な信頼」をソクラテスの心に植えたものは、一体、何だったのか？ それは、子供の頃から始まったという例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものに素直に従っていたら、必ずと言ってよいほど、「善い」結果をもたらすということの積み重ねがあつたからだろう。だとすれば、逆に、例の「ダイモンからの合図」に敢えて逆らった時には、一体、どういう結果になるかということを、ソクラテス自身は、はっきりと知っていたのだろうか？ 例えば、もし例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものに、生涯一度も逆らったことがなかったとしたら、ソクラテス自身は、例の「ダイモンからの合図」に敢えて逆らった時には、一体、どういう結果がもたらされるかを予測することはできたとしても、実際には経験していなかったことになる。それゆえ、恐らく、まだ人間として未熟な子供の頃には、その例の「ダイモンからの合図」に何度か逆らうようなことを敢えて行なうこともあつたのではないだろうか。そして、その例の「ダイモンからの合図」に敢えて逆らった時には、素直に従つた時とはまったく逆に、必ずと言ってよいほど、「よくない」結果をもたらしたのではないだろうか。そのような「経験」の長年の積み重ねから、やがて、ソクラテスは、例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものに「絶対的な信頼」を寄せるようになったのではないだろうか。この「問題」については、もう少し詳しく考えてみたいと思う。

*

*

ちなみに、「……このたびのできごとは、どうも、わたしにとつては善いことだったらしいのです」とあるが、例えば、もしソクラテスが、裁判に訴えられることもなく、やがて、何らかの「病氣や老死」などで死んで行ったならば、後世、ソクラテスは、これほどまでに有名な人物にはならなかったかも知れない。というのも、裁判に訴えられたからこそ、ソクラテスは、その法廷で、なぜ、自分は、毎日、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場(市場)や街頭、その他で、一日中、いろいろな人たちと「人間の諸問題」について積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていたのかという、その一連の「理由」(真意)を自らの「口」(肉声)ではっきりと語ることにしたとともに、ソクラテス自身の心の最も奥深くにあった根源的な「思い」(その中心思想)までも、まさに自ら

語ることになったのである。もし裁判に訴えられることがなければ、ソクラテス自身の「口」(肉声)からあれほどまではつきりと聞くことは永遠になったに違いない。しかも、裁判の結果、「有罪」(「死刑判決」)という、とうてい信じられないような結果となり、ソクラテスは、約一ヶ月後、その牢獄で、まさに「毒杯を仰いで従容として死んでいった」という、余りにも有名な「悲劇的な結末」となってしまったのである。しかし、その余りにも有名な「悲劇的な結末」となったがために、かえって、ソクラテスは、人々の意識の中に(再び)鮮明に「生き還る」(甦る)ことになり、しかも、最も決定的となったのは、やがて、その直弟子のプラトンの、いわゆる『ソクラテスの弁明』を初めとした実に「数多くの著作」によってこそ、ソクラテスという人物は、その「名前」を後世にまで永々と鮮明に遺すような結果になったということである。

七、ダイモンからの合図の推移

まず、子供の頃から始まったという例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」というのは、ソクラテスが、一体、何歳の時からなのだろうか？ もちろん、正確なことはもう誰にも分からないわけだが、ただ、われわれ人間の一般的な「内的成長」から推測すれば、恐らく、「幼児期」か「児童期」ではないかと思う。もし、「思春期」以降(つまり「第二次性徴とともに、自我がはつきりと目覚めて」)からであれば、それは、もう「子供というよりは、むしろ思春期に入る」し、また、そうであれば、ソクラテス自身、自分が何歳の時の、ある日、ある時、ある場所で、突然、あの例の「ダイモンからの合図」という不思議な合図をはじめた経験したという表現になっただろう。それゆえ、もう「子供のころ」からすでに始まっていたという何気ない表現は、それは、ある日、突然、生じてきたという感じよりも、むしろ、もう「もの心がつき始めた頃から」というような意味合いか、それとも、いわゆる「児童期(六歳から十一歳前後)まで」には、すでに始まっていたという意味合いか、そのどちらかであると考えてよいのだと思う。

そして、まだ小さな子供の頃には、ソクラテス自身は、例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」というものに、晩年ほどの「絶対的な信頼」を寄せていたわけではなかっただろう。というのも、一般的に言って、小さな子供の頃には、まだ様々な「目の欲や目先の感情」などに振りまわされることが多く、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されて、今まで「悪いこと」など一度も行なったことはなかったというわけにもいかないだろう。それゆえ、まだ未熟な子供の頃には、何度か様々な「目先の欲や目先の感情」などについつい負けて、例の「ダイモンからの合図」(つまり何々をしてはいけないという声)に、敢えて逆らうような行動をしようとするのも、何度かあったのではないだろうか。とにかく、まだ人間として未熟な子供の頃のことであるから。そして、そのような時には、素直に従っていた時とはまったく逆に、必ずと言ってよいほど、「よくない」結果(或いは「あとで後悔するような結果」)をもたらすことになったのだろう。そのようなことは「全くなかった」と考えるよりは、むしろ「少なくとも何度かあった」と考える方が、遙かに自然な考え方ではないかと思う。むしろ、一般の子供に比べれば、ソクラテス自身は、生来(或いは本質的に)「理性」による支配が非常に強く、それだけ「道徳観や倫理観」などの極めて強い子供であったということになるかと思う。

やがて、若いソクラテスは、一〇代後半から二〇代全般に渡って、極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることになるかと思う。というのも、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ない限りは、後年のような、あのギリシア随一とも言うべき卓越した「対話（吟味）活動」の達人とは決してなり得ないからである。それは、もう自分でもまったく手に負えないほどのもの凄い「知識欲（真善美欲）」（つまり「神的な恋（エロス）」）に強く襲われたということであり、そのような「知的遍歴」の結果として、やがてソクラテスは、真に「内的成長」を遂げるようになったかと思うが、それが恐らく、「三〇歳前後」ではなかったかと思う。そして、その頃あたりから、ソクラテスは、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものに対して、より全面的な信頼を寄せるようになったのではないかと思う。つまり、子供の頃から晩年に至るまで、一貫してもう全く変わることなく、例の「ダイモンからの合図」というものに「絶対的な信頼」を寄せていたという「考え方」もでき得るが、しかし、やはりソクラテス自身の「内的成長（成熟）度」にほぼ正比例して、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものへの「信頼度」もより強まり、より絶対的なものになって行ったと考える方が、遙かに自然で正しい考え方になるかと思う。

もちろん、子供の頃から、ソクラテスは、「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）にはできるだけ素直に従うようにしていたであろうが、ただここで特に言いたいことは、次のようなことである。つまり、たとえ子供の頃から晩年に至るまで一貫して例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものと同じように素直に従っていたとしても、やはり、ソクラテス自身の「内的成長（成熟）度」にほぼ正比例して、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）というものに対する「考え方」や受けとめ方或いはそれに対する「信頼度」などには、当然のことながら、違いがあったというのである。

それは、例えば、子供の頃には、親や大人の人たちからよく「あれはだめ、これはしてはいけない」と様々な道徳的なことを押しつけられた時に、その子供は、「……一体、なぜ、あれはだめなのか？ また、どうしてこれはしてはいけないのか？」、その本当の「理由」（真意）もよく分らないままに、ただ言われたままに素直に従っている場合が多いかと思う。やがて、人間として十分に「内的成長（成熟）」してきて、自らの「理智的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）の全面的な働きによって、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等が厳密にでき得るようになれば、その人自ら、「……ああ、なるほど、これはこういう理由でだめなのか、また、ああ、あれはこういう理由で、やっぱりしてはいけないことなのだ」というように、その人自身の心から納得のいく判断で、自主的に「どうしても自分にはそういうことはできない」という、真に「成熟した道徳観」になっている状態とでは、極めてはっきりとした違いがあるということである。

つまり、子供の頃のまだ「未熟な道徳観」と、その人の「内的成長（成熟）」にともなうて生じて来る、その人の真に「成熟した道徳観」とは明らかに違うものである。というのも、その真に「成熟した道徳観」というものは、外からの「制約や規制」などによるものではなく、（むしろ）その人自身の内からの「道徳的（倫理的）規制」であり、それゆえ、「人が見ているから、そういうことはできないとか、人を見ていなければ、少々悪いことをやっても構わないとか、あるいは法に触れなければ、何をやっても構わない」とい

う、一般的（或いは世俗的）な「道德観」とはまったく違うものであり、真に「成熟した道德観」というものは、人が見ていようが見ていまいが、また、様々な「法律」（法）に触れようがふれまいが、そういうことはまったく関係なく、その人自身の心の最も奥深いところに内在している「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの道德的（倫理的）規制であり、それがソクラテス自身が実践していた真に「成熟した道德観」であり、それをソクラテス自身の言葉で言えば、「……他人から不正を受けても、自ら不正を加えることはしない」という言葉になるわけである。それは、「目には目を、歯には歯を」という、われわれ人間の本能に深く根ざした「価値観や道德観」の固い殻が（か）ついに破れて、イエス・キリストの、いわゆる「……誰かがあなたの右の頬を打ったら、左の頬を向けよ」という道德観にも共通したものになるわけである。

それでは、そのような真に「成熟した道德観」というのは、一体、どのようにして獲得されるものかと言え、それは、若い時に、その人にもまったく手に負えないほどのもの凄しい「知識欲（真善美欲）」（つまり「神的な恋（エロス）」）に襲われることよってこそ、その人は、やがて真に「内的成長」を遂げることになるかと思うが、ただ、それだけではソクラテスという人間が実践していた真に「成熟した道德観」とはなり得ないのである。というのも、われわれ人間の「魂」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概（激情）的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、われわれ生身の人間というのは、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうことが非常に多く、それゆえ、ソクラテスが実践していたような真に「成熟した道德観」となるためには、その人がどうしても「理知的部分」に全面的に支配されて、それにどっぷりと身を任せることよってのみ、初めて可能となる「究極の道德観」なのである。なぜなら、その「道德観」は、その人自身の心の最も奥深いところに内在している「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）に全面的に支配されているために、様々な「欲望や感情」などに振りまわされて、いろいろな「不正や不道德なこと」を行なおうとしても、それができないということである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、その人自身の「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）から、そういうことをすることに對して、絶えず「禁止の合図」（つまり「チェック」）が入ることになるからである。それが、すなわち、ソクラテスの例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」ということになるわけである。そして、ソクラテスという人間こそは、まさに人類史上極めてまれにみる真に「成熟した道德観」のほとんど信じられないほどのまさに正真正銘の実践者であったということである。

つまり、ソクラテスは、自分の心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す、敢えて「内なる神」）に全幅の信頼を寄せ、それにどっぷりと身を任せていたということである。そして、ソクラテスをして何よりも「知を愛し求めてやまぬ」（つまり何よりも「真善美」を愛し求めてやまぬ）ように根底からつき動かしていたものこそは、まさにソクラテス自身の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）であったということであるとともに、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が、ソクラテス自身の内部で（太陽のごとく）生き生きと躍動をしていたからこそ、ソクラテスは、死ぬまで人間としての「真実・真理」を説いて、休みなく活動することができ得たということでも

* あるわけである。

*

「量刑」の申し出の「謎」

「量刑」の申し出の「謎」について

さて、ソクラテスが、「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」と呼んでいたものは、実は、ソクラテス自身の心の最も奥深いところに内在していた「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの声（禁止の合図）だったということになるわけである。そして、ソクラテスは、その「裁判」に臨んで、何よりも「事実や真実」を語ることに重点をおき、わが身可愛さから、つまり、少しでも刑が軽くなるようにと、いろいろと「うそやでたらめなこと」を言ったりすることは、すべて避けたということになるかと思う。だとすれば、プラトンの『弁明』のなかで語られている内容は、プラトン自身の「作為」（或いは記憶違いの記述等）でない限りは、ソクラテス自身の「心の底からの偽りのない言葉」ということになるわけである。そして、そのような「心の最も奥深いところにあつた様々な『思い』を語ることに」対して、例の「ダイモンからの合図」による「チェック」（禁止の合図）が全くなかったということは、ソクラテス自身にとって、それらはすべて「当を得た」おこないだったということになるわけである。

つまり、ソクラテスは、その法廷において、すべて「ほんとうのことを話した」のであり、一つとして「うそやでたらめなこと」は言わなかったということである。だからこそ、「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」というものが全くなかったわけである。もし、何らかの「うそやでたらめなこと」を言おうとしたならば、必ず、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」というものがあつたはずであり、そういうことが全くなかったということが、その法廷において、ソクラテスは、まさに「すべてほんとうのこと」（つまり「事実や真実」のみを語った）ということの、何よりの「絶対的証拠」となるものである。

例えば、ソクラテスは、その法廷で、いわゆる「有罪の判決」を受けたあと、今度は、自ら「量刑」を申し出る段階になるわけだが、その時に、ふつうであれば、涙に訴えたり、同情に訴えたりして、できるだけ「軽い刑」になるようにと申し出るのが一般的かと思うが、ソクラテスは、それとはまったく違って、そこに出席していた数多くのアテナイ人たちも啞然とするような、とんでもない「量刑」を申し出るわけである。それは、つまり、「……（わたしは）、あなた方の一人一人をつかまえて、自分自身ができるだけすぐれた者となり思慮ある者となるように気をつけて、自分にとって付属物となるだけのものをつしてそれに優先して気づかうようなことをしてはならない。（中略）、と、説得することをこころみていたのです。

すると、このようなことをしてきたわたしは、何を受けるのが至当でしょうか。なにか善いことをでなければなりません。アテナイ人諸君、もしも、ほんとうに至当の評価を受くべきものだとすればです。（中略）、それなら、何が適当するでしょう。（中略）、それは、市の迎賓館において給食を受けるほど適当なことではないのです。（中略）

そうするとたぶん、あなた方には、わたしがこういうことを言うのも、（中略）、意地をはってこんなことを言っているのだと、思われるでしょう。しかしそれは、アテナイ人諸君、そうではなくて、むしろ、こうなのです。

わたしの確信では、世の何人に対してもわたしは故意に不正を加え、罪をおかすようなことはしていません。（中略）、（それゆえ）、自分のほうから何か害悪を受けるのが当然

であると言つて、自分自身に不正を加えようとすることは、わたしの思いも及ばぬことな
のです。いったい何を恐れて、そんなことをしなければならないのでしょうか(36b～37b)
とあるが、このような言葉、つまり、ソクラテス自身、自分が行なつてきたことの報酬と
しては、いわゆる「市の迎賓館において給食を受けるほど適当なことはない」と言う時、
それは、まさに「心の底からそう思っていた」ということであり、決して、「冗談や強がり」
などでは断じてないということが、何よりも大事なことなのである。——すなわち、プラト
ンの『弁明』のなかに書かれている「内容」のすべては、プラトン自身が故意に「うそや
でたらめなこと」を書いたり、あるいは「記憶違いなどから間違つた記述」などをしたの
でない限りは、そのままソクラテス自身の「心の底からの全く偽りのない言葉」というこ
とになるわけだ。なぜなら、実際のソクラテスは、その法廷において、「すべてほんとう
のこと(つまり、『事実や真実』のみを語つた)のであるからである。それでは、なぜ、
そうだと断言できるのかと言えば、その「絶対的証拠」となるものが、まさに例の「ダイ
モンからの合図」(つまり「神からの合図」というものが、ただの一度もなかったとい
うことによるのである。

*

*

第四部

ソクラテスの「産婆術」

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第四部

④ソクラテスの「産婆術」

- 一、 産婆とは
- 二、 産婆術とは
- 三、 なぜ、智を生めない者なのか
- 四、 神が定め給うたとは

* 参考文献

ソクラテスの「産婆術」

ソクラテスの「産婆術」について

それは、プラトンの『テアイテトス』という著作のなかに出てくるものである。そして、そのソクラテスの『産婆術』が最も効果的な成果を上げ得るのは、やはり若い人たち（青年たち）を相手に行なわれる場合が多いのだろう。というのも、若い人たち（青年たち）は、まさに「心身ともに著しく成長していく時期」にあたっているからであり、肉体がどんどん成長するためには、どうしても多くの「食料」（様々な「栄養分」）を十分に摂取することが必要不可欠であるのとまったく同じように、精神がどんどん成長するためには、どうしても多くの「知的食料」（様々な「栄養分」）を十分に摂取することが必要不可欠になって来るからである。——つまり、若い人たちは、少し前に食事をしたばかりなのにもう腹を減らしているというように、いつも「空腹感」を感じているような状態になりやすいものであるが、それとまったく同じように、若い時には、まさに極めて旺盛な「知的好奇心」（いわば精神的「空腹感」）から実に様々なものに「興味や関心」を示すことになるわけである。もちろん、それが単なる「興味本位」からであったとしても、その根底には、やはり、いろいろなことを見聞きして知りたいという基本的な「知的欲求」が内在していることに何ら変わりはないだろう。

そのように、若い人たち（青年たち）というのは、もう実にいろいろなことを見聞き知りたいという「知的好奇心」に満ちあふれているものである。そして、その精神的な「空腹感」からこそ、例えば、いろいろな書物や雑誌などを読んでみたり、また、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、音楽、芸能、ファッション、旅行、恋愛、スポーツ、また、人によっては、政治、経済、ボランテニア活動、そして、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他、もう実に様々なものに「興味や関心」を示すようになるかと思う。

そして、その人が、一体、どのようなものに「興味や関心」を示すかは、その人の「内的成長」にとっては極めて大きな意味を持つものである。しかも、若い時に、その人が心から「夢中になったもの」（或いは「心酔した対象」）からは、ほとんど計り知れないほどの決定的な影響を受けることが非常に多いわけである。——例えば、若いプラトンが晩年のソクラテスとめぐり逢い、その「影響」をもろに受けることになったのをみても、よく理解できるものであるが、それでは、なぜ、そうなのかをもう少し考えてみたいと思う。

まず、われわれ人間というのは、この世に誕生してから「乳幼児期、児童期、そして、思春期（青年期）」と向かっていくわけだが、この時期までを大きく二つに分けるとすれば、いわゆる「自我が目覚める」前までの「児童期」と、「自我がはっきりと目覚める」ことになる、いわゆる「思春期（青年期）」とに分けられることになるかと思う。

そして、「自我が目覚める」前までの「児童期」（小学三年生ぐらい）までは、物事の「真偽」をそれほど深く問うこともなく（つまり深く考えることもなく）、目に見えるもの、耳に聞こえるもの（つまり「感覚界」でとらえられるもの）を、多くはそのまま「事実（或いは真実）」のこととして素直に受け入れている時期であるとともに、親や先生あるいは大人たちの言うことなども、比較的素直に受け入れている時期であるが、「自我がはっきりと目覚める」ことになる、いわゆる「思春期（中・高時代）」ともなれば、今までとは違って、何事も「自ら考え、自ら判断しようとする意識（つまり自我）」がはっき

りと現われてきて、親や先生あるいは大人たちの言うことなどに対しても、実に様々な疑問や矛盾などを感じるようになるわけである。

そして、その「思春期（青年期）」になると、まさに「心身ともに著しく成長する時期」に入るわけだが、そのためには、最初にふれたように、肉体がどんどん成長するためには、どうしても多くの「食料」（様々な「栄養分」）を十分に摂取することが必要不可欠であるのと全く同じように、精神がどんどん成長するためには、どうしても多くの「知的食料」（様々な「栄養分」）を十分に摂取することが必要不可欠になって来るわけである。それゆえ、この時期には、目覚めた自我がどんどん成長しようとして、自分でもびっくりするようなもの凄い「知識欲」（つまり多くの「知的食料」）を摂取しようとする欲求に襲われるものである。それは、十二歳から十七歳までの前半期（つまり「中・高時代」）から始まり、やがて、自分でももうまったく手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（それは「より高質の知的食料」など）を貪欲に摂取しようとする欲求に襲われるものであるが、それこそは、まさに「心の嵐」（つまり「神的な恋（エロス）」）であり、それは、三〇歳前後まで（正確にはその人が真に「内的成長」を遂げるまで）続くことになるかと思うが、その「前半期・後半期」とを合わせたものが、いわゆる「知的遍歴時代」であるとともに、最も生産的な「第一期黄金時代」を過ごすことにもなるわけである。

一、産婆とは

さて、本題である、ソクラテスの「産婆術」にもどりたいと思うが、その前に、まず本来の「産婆」たちの仕事の特徴について、『テアイテス』のなかからその記述箇所を拾い集めてみると、次のようになるかと思う。つまり、「……妊娠か否かの識別は、他の誰かの仕事であるよりも、まず産婆の仕事である」とともに、「……また産婆たちの手で出来る仕事には、ちよつとした投薬をしたり、唱えごとをしたりして陣痛を起こすことがあり、またその必要を認める場合には、これを和らげることもあるのではないか。そのほか彼らは産の困難な者に産をさせたり、あるいはまた胎児がまだ少いから流産させた方がよいと考えられる場合には、流産させたりするのではないか」。さらに、「……かれらは、いかなる女はいかなる男と一緒にあって最良のこともを産むべきかということを識ることにおいて言わば全智なる者であるから、結婚媒介者としても決してばかに出来ない者であり」、それは、「……思うに真の産婆である者にのみまた正しい意味における結婚媒介ということも属するものである」と。——この最後の真の「産婆」は、また、真の「結婚媒介者」でもあるという「考え方」は、恐らく、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という著作のなかに、「……彼（ソクラテス）ほど自分の弟子たちのおのおのがいかなる知識があるか、これを知ろうとつとめた者はなかったのであり、そしてまた、君子たる者が知るにふさわしい事物は、もし自分が知っておれば、誰よりも熱心にこれを教え、もし自分のよく知らぬ問題であれば、これを熟知する人々の所へ弟子たちを連れて行ったのである」（4・7・1）という、そのような実際のソクラテスの行為を踏まえて、プラトンがつけ加えたものになるのだろうか。

以上が、本来の「産婆」たちの仕事であるが、それでは、ソクラテスの「産婆術」とは、一体、どういうものであるかは、次のようになるかと思う。つまり、「……僕の心得てい

る産婆取り上げの術は、いま言った産婆たちのもっているほどのものは、むろんみな所属して、ただ異なるところとしては、男たちのために取上げの役をつとめるのであって、女たちのためでないということ、しかもその精神の産をみとるのであって、肉体のをではないということがあるのではあるが、しかし、このほかに、僕たちの技術には、一番大事なことでこういうのが含まれている。すなわち当の青年が思考を働かして分娩したところのものが、にせもの偽物や偽物であるか、それとも正物ほんものであり真物であるかを百方検査するということが「この技術を心得ている者には」できるといっているのである。なぜこれが一番の大事であつて他にこれ以上のことはできないのかというと、それは次のような事情が産婆たちにあると同じように僕にもまたあるからなのだ。——すなわち、僕は智を生めない者なのだ。そしてそれはすでに多くの人たちが僕に非難したことなのであるが、僕は他人には問いかけるが、自分は、何の知恵もないものだから、何についても何も自分の判断を示さないというのには、いかにも彼らの非難のとおりである。これにはしかし次のような仔細がある。僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちつとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もないしだいなんだ。ところが、僕と一緒にいる者、僕と交わりを結ぶ者とはというと、はじめこそ全然無知であると見える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによつても、また他人に思われるところによつても、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」(150c～D)

引用が長くなったが、しかし、ここにこそ、ソクラテスの「産婆術」の何たるかが非常にはつきりと言明されているのであり、それについて、もう少し詳しく考えてみたいと思う。——まず、晩年のソクラテスは、若い人たちを見つけては、正義とは何か、不正とは何か、勇氣とは何か、美とは何か、善とは何か、敬神とは何か、その他、そのような形で、親しく問いかけていくわけである。それに対して、若い人たちは、その人なりに何らかの「答え」をすることになる。そして、その「答え」をソクラテスはいろいろな角度から吟味することによつて、その答えが「完全なるもの」(つまり「真知」)でないことを相手にわからせる。そこで、若い人たちは、再び、あれこれ考へては何か新たな「答え」をすることになるが、それもソクラテスの厳密な吟味に耐えられずに否定されてしまう。——そのようにして、お互い親しく「対話(吟味)活動」を積み重ねていくことによつて、次第にその人だけの「思考(思索)能力」だけではとてもそこまで深く入つて行けないようなどころまで、ソクラテスの巧みな話術に導かれて、一緒に考へ深めていくことになるかと思う。つまり、ソクラテスの巧みな話術に導かれて、その人だけの「思考(思索)活動」だけでは、とてもそこまで深く入つて行けないようなどころまで、知らず識らずのうちに、ソクラテスと一緒にものを考へ深めている状態になつていくことである。

そのように、ソクラテスの「産婆術」の最大の特徴は、相手に「ものを考へさせる」ところにあるわけである。そして、相手に「ものを考へさせる」ためには、何よりもまず、ある「問題」を相手に提示することから始めなければならぬ。それが、いわゆるソクラテスの「問いかけ」であり、その「問いかけ」が、すなわち、正義とは何か、不正とは何か、勇氣とは何か、美とは何か、善とは何か、敬神とは何か、その他、そのような人間に

とつて最も根本的な「諸問題」になるわけである。それでは、なぜ、ソクラテスは、そのような人間にとって最も根本的な「諸問題」を敢えて問いかけたのかと言えば、それこそ、まさにわれわれ人間にとって最も大事な「問題」であるからであろう。

そして、晩年のソクラテスは、そのような「問題」を相手（ここでは特に若い人たちに「問いかける」ことによって、相手は、その「問題」についてその人なりにあれこれ思いをめぐらし、考えたあとで、何らかの「答え」をすることになる。そのように、相手にあれこれ「考えさせ、答えさせる」ことが最も大事なことであり、もしソクラテス自身が、最初から「正義とはこうである」と、若い人たちに答えたのでは、若い人たちは、ただ「正義とはこうである」という「知識」だけを受け取って、自らは、何も少しも「考えない」ことになってしまうだろう。

それでは、若い人たちの「思考（思索）能力」は、少しも「成長・成熟」していかない。それゆえ、ソクラテスは、相手に「ものを考えさせる」ためにも、自らは、進んで「正義とはこうである」というような判断を示さないようにしているのである。

つまり、大事なのは、あれこれの「答えや知識」などではなく、むしろ自らいろいろな角度から物事を厳密に「思考（思索）」でき得るような、そういう「思考（思索）能力」をしつかりと身につけることであり、そのためには、どのような「思考（思索）過程」を経、そのような「答えや結論」に辿り着いたのか、その「思考（思索）過程」こそは、何よりも大事なことになるのである。それでは、どうすれば、そのような「思考（思索）過程」（つまり「思考の歩み、そのもの」を、若い人たちに教える（つまり「しつかりと身につけてもらう」）ことができ得るだろうか。——それには、自ら若い人たちと親しく「対話（吟味）活動」を積み重ねては、相手の「答え」のどこがどのように不十分（完全ではない）かを相手にしつかりと理解されながら、次から次へと相手の「答え」を否定していくことによつてこそ、相手の人は、知らず識らずのうちに、ソクラテスの巧みな話術に導かれて、自ら実にいろいろな角度から「物事をとらえ、考え深めること」を行なっていることになり、そのようにしながら、相手をより「真実・真理」の方向へと導いていくことができ得るとともに、その相手の「思考（思索）能力」を真に「成長・成熟」させることもでき得る。そして、そのような「方法」こそ、まさにソクラテスが実践していた、いわゆる「哲学的問答法」（つまり「対話（吟味）活動」）になるということである。

そして、ソクラテスとしては、最終的には、若い人たちが、自ら物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るような、そういう精神の自立した「一人の人間」になつてもらいたいということにもなるのだろう。

二、産婆術とは

それでは、もう一度、ソクラテスの「産婆術」を順を追って考えてみたいと思うが、まず、若い人たちの「心の中」には、例えば、「人間とは何か、どのような生きたらよいのか、自分とは何か、また、人間にとって何が大事であり、何がどうでもよいことなのか、そして、善とは、悪とは、正義とは、勇気とは、生とは、死とは、その他」、そういう人間に関する最も根本的な「問い」（つまり「哲学的問いかけ」）は、すでに「芽生えていく」かと思う。むしろ、それには個人差があるだろうが、しかし、その「芽生えた問い」

が、その人の「心の中」でだんだんと大きな「問題」となって来れば、それこそは、まさに精神的「妊娠」であり、その「妊娠」して大きくなった「疑問」を何とか解きたいと思うわけである。しかし、まだ未熟な若い人たちの「思考（思索）能力」だけでは、それらのどの「問題」も、容易に「答え」が得られるようなものではないだろう。そこで、まだ未熟な若い人たちの「思考（思索）活動」に適切な「助言（問答）」を加えながら、より「真実・真理」の方向へと導き、そして、最終的には、その人自身の「思考（思索）活動」の力によって、無事に「精神的出産」（つまり「知識を生むこと」）をさせようとするのが、すなわち、ソクラテスの「取り上げ術」（つまり「産婆術」）としての仕事になるわけである。そして、その取り上げた「知識」が、まさに「完全なるもの」（つまり「真知」）であるかどうかを、最終的に、もう一度、ありとあらゆる角度から徹底的に「吟味・検討」し直すことになるということである。

つまり、ソクラテスは、いろいろな若い人たちと親しく「対話（吟味）活動」を行なうことによつて、そのいろいろな若い人たちのなかで、誰がどのような「問題」で精神的「妊娠」をしているかを容易に見つけ出しては、例えば、もしある若者が「知識とは何か」という問題で、その答えが思うように得られず、悩み苦しんで「陣痛」を感じているようならば、ソクラテスは、その若者に親しく「問い」かけて、相手に何らかの「答え」をさせることになるわけである。そして、その若者が答えた「答え」を、ソクラテスは、いろいろな角度から相手との「対話（吟味）活動」で徹底的に「吟味・検討」することによつて、その「答え」が、いわゆる「完全なるもの」（つまり「真知」）ではないことを、相手にはつきりと分からせる。そこで、その若者は、再び、真剣にあれこれ考えては、新たな「答え」を出すことになるが、その「答え」も、ソクラテスの徹底した「吟味・検討」によつて、否定されることになる。それゆえ、また、新たな「答え」を提示するが、それもまた、否定されてしまうというように、「知識とは何か」という問題をめぐって、まさに徹底した「対話（吟味）活動」が展開され、実にいろいろな角度から物事をとらえ、考え深めていくということの積み重ねによつてこそ、より「真実・真理」の方向へと向かって行くことにもなるということである。

むろん、多くは「行き詰まり状態」になり、これという最終的な「答え」（つまり「真知」）が得られないままで終わってしまうわけだが、しかし、その若者は、ソクラテスの巧みな話術に導かれて、その人だけの「思考（思索）能力」だけではとてもそこまでは深く入って行けないようなところまで、また、実にいろいろな角度から物事をとらえ、考え深めていくことを、まさに身を以つて学ぶことになり、それゆえ、その若者の「思考（思索）能力」というものは、確実に「成長・成熟」していくことになるわけである。そして、その人の「思考（思索）能力」が真に「成長・成熟」していくならば、あれこれの知識などは、何も他人からわざわざ教わらなくても、いつでもその人自身の「思考（思索）活動」からいくらかでも生み出すことができるわけである。——それゆえ、われわれ人間にとつて最も大事なことは、あれこれの中途半端な「答えや知識」などではなく、むしろ自らいろいろな角度から物事を厳密に「思考（思索）」でき得るような、そういう「思考（思索）能力」をしつかりと身につけることであり、そのような「思考（思索）能力」をしつかりと「話し相手」（ここでは特に若い人たち）に身につけさせるようなことを行なっていたのが、まさにソクラテスの「産婆術」ということであり、それによつて、次のような結果

にもなるのである。それは、「……僕と一緒にになる者、僕と交わりを結ぶ者は」というのははじめこそ全然無知であると見える者もないではないが、しかし、すべてはこの交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによっても、また他人に思われるところによっても、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」ということになるのである。

三、なぜ、智を生めない者なのか

それでは、最後に、ソクラテスは、なぜ、智を生めない者なのか、この問題についても、すこし考えてみたいと思う。

そのためには、まず、ソクラテスが実際に行なっていた「思考（思索）活動」というものが、一体、どういう「特徴」を持っていたかをよくよく考えてみなければならぬ。なぜなら、そこにこそ、すでに「智」が生まれにくい特徴が、すでに「内在している」ことになるからである。というのも、ソクラテスという人が実際に行なっていたのは、ある不安定な「土台」の上に何か豪華な「建築物」（つまりその人なりの「考えや思想」）などをうち立てようとしたのではなく、むしろその不安定な「土台」というものを次から次へと否定することを積み重ねては、最終的には全く揺るぎのない「土台」を得たいという「思考（思索）活動」を行なっていた人である。——例えば、正義とは何か、不正とは何か、勇気とは何か、美とは何か、善とは何か、敬神とは何か、その他、どのようなことであれ、それらのことは、「すでに知っているもの」として、敢えて厳密に「吟味・検討」し直すこともせず、ほとんどの人たちが、それらの言葉を安易に使用して、その人なりの「考えや意見」などをうち立てているわけだが、ソクラテスは、むしろそれらのことをどこまでも徹底的に「吟味・検討」し直すことを行なっていた人である。

それでは、ソクラテスは、一体、いわゆる「知識」というものをどのように考えていたのかと言えば、それは、一般の人たちとは非常に違っていて、中途半端な「知識」というものを決して「知識」とは認めずに、いわゆる「完全なる知識」のみを真の「知識」（つまり「真知」と考えていたわけである。——つまり、ソクラテスは、社会一般に安易に「真知」と認められてはいるが、厳密には中途半端な「知識」というものを徹底的に「吟味・検討」し直して、次から次へと否定していき、まさに「完全なる知識」（つまり「真知」を得ようとしていたがために、次から次へと「智（知識）」を生むようなことには、まったく不向きであったということである。

しかし、一方、それぞれの「知識」が、まさに「完全なる知識」（つまり「真知」）であるかどうかを、あらゆる角度からどこまでも厳密かつ徹底的に「吟味・検討」することにかけては、誰よりも優れていたことになるわけだ。すなわち、ソクラテスという人は、真の「知者」である「全知全能の神」ならば、まさに「完全なる形」ではっきりと観て取っているであろう、われわれ人間にとっては遙か彼方かなたにある、まさに「完全なる知識」（つまり「真知」）というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまないという「思考（思索）活動」そのものを行なっていた人であり、それゆえ、たとえば真実らしい「答え」を得ても、それに決して満足することなく、若しもそれに満足してしまえば、ソクラテスのあの徹底した「無知の自覚」というものは、生まれようがないのであ

る。それゆえ、ソクラテスは、たとえある真実らしい「答え」を得ても、それに決して満足することなく、それをまた、あらゆる角度からより厳密に「吟味・検討」し直しては、やがては「否定」してしまうという、そういう次から次へと無限に否定を積み重ねていくような「思考（思索）活動」そのものを行なっていたからこそ、ソクラテスという人は、あのような徹底した「無知の自覚」というものを、はっきりと持つことができたとしたことである。

そして、そのような遙か彼方かなたにあるまさに「完全なる知識」（つまり「真知」）というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない「思考（思索）活動」そのものこそは、まさにソクラテスという人間が実際に行なっていた「智を愛し求めてやまぬ」という、いわゆる「愛知学」（哲学）というものの最大の特徴の一つになるかと思う。そのように次から次へと無限に否定を積み重ねていくような「思考（思索）活動」を行なっていたがために、いつまで経っても、これという「智（知識）」というものを「生み出す」ことはできないということにもなるわけである。——むろん、それだけの説明では、ソクラテスが「智が生めない」という理由のすべてにはならない。というのも、そのような優れた「思考（思索）能力」を持ち合わせていれば、当然のことながら、何らかの「智（知識）」を生もうと思えば、できないこともないだろうということになるからである。それでは、なぜ、ソクラテスは、智が生めない者なのかという、もう一つの大きな理由を考えてみなければならぬ。

四、神が定め給うたとは

さて、前述の「本文」の中に、「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。……」ということも明言している。それでは、ソクラテスは、一体、何を根拠にそのようなことを言うのだろうか。それは、あの有名な「デルポイの神託」の「謎かけ」とも深く関わって来るものである。——つまり、友人カイレポソという人が、わざわざ「デルポイの神殿」まで赴き、そこで、「ソクラテスよりだれか知恵のある者はいるか」と尋ねたところ、その巫女は、「より知恵のある者はだれもない」と答えた、ということ、その友人から聞いてから、ソクラテスは、自分の「心の中」で次のように考えたというのです。「……いったい何を、神は言おうとしているのだろうか。いったい何の謎をかけているのだろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだと自覚しているのだから。すると、そのわたしをいちばん知恵があると宣言することによって、いったい何を神は言おうとしているのだろうか。」（『ソクラテスの弁明』22b）と。

そこで、ソクラテスは、長いあいだ、思い迷った末に、やっこのことで、ある「考え（思い）」がふと浮かんで来るわけである。——それは、誰か知恵があると思われている者の一人をたずねて、その人といろいろ話をしてみれば、「……ほら、この人の方が自分よりも知恵があるじゃないかと、神託に反駁できるだろう」と考えたわけである。そこで、ソクラテスは、最初は、政治家、次に、いろいろな作家、そして、最後には手に技能を持つ人たちと、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていくうちに、知らないことは知らないとはっきりと自覚している自分のほうが、知らないのを知っ

ていると思ひ込んでいる人たちよりは、すこしは知恵があるのかも知れないと思うようになり、そうすると、例の「デルポイの神託」が言われたことも、どうも否定しきれないものと考えて、次のような結論を出すことになるわけだ。

それは、一般に、わたしは「知者」だと思われているが、「……しかしじつさいは、諸君よ、おそらく、神だけがほんとうの知者なのかもしれないのです。そして、人間の知恵というようなものは、なにかもう、まるで価値のないものだと、神はこの神託のなかで言おうとしているのかもしれませんが。（中略）、そして、いちばん知識のある者というのは、だれであれ、ソクラテスのように、自分は知恵に対してはじつさい何の値打ちもないのだということを知った者がそれなのだ、言おうとしているもののようなのです。……」（『ソクラテスの弁明』23A）とある。

もちろん、そのような「結論」だけならば、ソクラテスにとっては最初からわかりきっていたことであり、それをあらためて「再確認」したという程度の意味にしかならない。それゆえ、そのような「答え」だけならば、その後のソクラテスの「行動」をまさに決定づけるような劇的な「心的事件」とはなり得なかつただろう。それでは、一体、ソクラテスの「心の中」でどのようなことが起きたからこそ、その後のソクラテスの「行動」をまさに決定づけるような劇的な「心的事件」となり得たのだろうか。——ここが最も大事なところであるが、ソクラテスは、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なつていくうちに、知らないことは知らないとはつきりと自覚している自分のほうが、知らないのに知っていると思ひ込んでいる人たちよりは、少しは知恵があるのかも知れないと思うようになり、そうすると、例の「デルポイの神託」で言われたことも、どうも否定しきれないものと思ひながらも、それでは、なぜ、「神」は、わざわざ友人であるカイレポンを介して、いわゆる「ソクラテスより知恵のある者はだれもない」などという「謎かけ」を、どうして自分にしてきたのだろうかとあれこれ考えているうちに、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、「ああ、そうか！」と、或る「想ひ」に襲われることになるわけである。そして、それこそは、まさに劇的な「心的事件」の「決定的瞬間」ともなり得ているものである。

——「ああ、そうか！」、こうやつて、毎日、誰か知恵があると思われる人がいれば、もう老若男女を問わず、また、どのような分野のどのような人であれ、その人と親しく「対話（吟味）活動」を積極的に行ないながら、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思ひ込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはつきりと自覚させるような行為（行動）、そのような行為（行動）は、例の「デルポイの神託」以降、自分よりも知恵のある人を見つけ出しては、神託に反駁したい一心から、結果として、ずっと行なってきたわけだが、しかし、今から思えば、まさにこのような行為（行動）をさせるためにこそ、「神」は、わざわざあのような「謎かけ」を、「私」にしてきたに違いないと解釈するわけである。この時、ソクラテスは、はつきりと神の「謎かけ」の真意を理解したことになるわけである。——すなわち、これからの人生で自分がこの世でやらなければならぬことは、どのような分野のどのような人であるを問わず、必要があれば、どの誰とでも積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でも

あるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手の「無知」（つまり様々な「思い違い」）をはっきりと自覚させるようなこと（つまり相手の「心の眼」を目覚めさせること）こそは、すなわち、「神からの絶対的な命令」であると考えられるようになるわけである。——なぜなら、われわれ人間の、実に様々な「無知」（つまり様々な「思い違い」）こそが、まさに自分に対して、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍（不幸）」をもたらしている。「最大の原因」（まさに源泉そのもの）であると考えていたからである。

それゆえ、ソクラテスは、人々の「無知」（つまり様々な「思い違い」）をはっきりと自覚させ、人々の「心の眼」を真に目覚めさせるような、そういう「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）を積極的に行なうようになるわけだが、それは同時に、自らの物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るような人間へと、つまり、「自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間となる」方向へと「対話相手」を導いていくことが、まさにソクラテスの「産婆術」であるとともに、そうすることが、そのまままさに「神からの絶対的な命令」であると固く信じて、ソクラテスは、あれこれの「知識」を生むような方向ではなく、むしろ人々の「心の眼」をはっきりと目覚めさせるような、そういう方向へと向けて、死ぬまで積極的に「対話（吟味）活動」（すなわち「哲学的問答法」）を行なうようになるわけである。なぜなら、それこそは、まさに「神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）であると固く信じていたからであるとともに、それこそは、すなわち、「……僕は取上げの役の方をしなければならぬように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。……」という言葉の「真意」になるかと思う。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「世界の名著プラトンⅠ」(中央公論社)
- ※底本 「パイドロス」藤沢令夫訳(岩波文庫)
- ※底本 「テアイテトス」田中美知太郎訳(岩波文庫)